

44

11011

# 要大歌唱



著兒木青

亨木見著

唱歌法大要

安達書店藏板

明治  
37 4 19  
内交

唱歌なる各日は平く次に明治五年の  
学割中に見かれども當時はまだ其の  
実あらず、姫めて我が日本に唱歌なるもの  
あるに否乎しはそれより数年の後にして  
これが傳ひのえ能は實に東人ノリウレ氏  
その人なること既に世人の熟知するところ  
なるべし。

かゝる歴史を記憶に存してこそくくりに  
於ける唱歌の現状を究ればその善ぬ及發達  
の處に於て是を得に當るべきものなきにあらず  
然れども翻て彼の欧米諸島の人民が上下を  
りして之を知らざるなく之を能くせざるなく之を  
采りたるなきの感現に比すれば我れの幼稚なる  
こと強んご悔悛に堪へざるものあり、彼の紳士にして

尚ほ此の必要をだに能くせざるものあるに  
して、誰か不足の感なきをゆんばされば  
いふまでもなく唱歌は今後善く善ぬせしめざる  
べからず、今發達せしめざるべからず、唱歌の善  
及劣を述べ、實に吾民性格の修養上一つも  
欠陥に付すべからざる歴史を志すべし、  
ハルカキニ。

此本氏著はすところのげの唱教法は斯道の  
天才を有する氏が多年その修養錬磨の  
るに於て自は著せられたるものには際すと  
言ければその我が唱教の善なる處は遙に劣る  
するところ必ず極めて大なるぶらさを行する  
の理由あり、是れ余が師が茲に「こと」を  
して唱教の善をを表する所なり。

明治三十二年十二月雪の日に新澤に於て

和田 豊彦 識

## 謝 辞

本書を出版するに際し紀念の意を以て序文を當時新潟師範學校長たりし和田豊先生に乞ひしに、快諾せられ自から筆を執つて書せられたる好意は深く感謝する所に候、發音に就ては宮澤甚二郎氏に説を乞ひ、表紙畫は山崎維新氏に勞を煩はし其文字は之を倉島篤次郎氏に御依頼致し候處諸兄が御多忙中をも厭はず吾意を容れ玉ひ、本書に一段の光彩を添はられしはあつく感謝する處に候、是處に謝辞を述べて以て後日の爲にす、  
頓首再拜

著 者、 兒

雜務に就ては幾尾純氏大に勞ゆられしを謝す、紀念  
せの爲め一筆を加ふ、

# 唱歌法大要 目次

## 上卷

第壹章 緒言	一頁
第貳章 樂典一斑	十二頁
第參章 普通唱歌法	二十頁
普通唱歌法に必需なる畧譜	獨習者に向つての注意
聽覺練習	發聲
練習の方法	注意
第四章 高等唱歌法	三十四頁
(上) 本譜	畧譜
音程練習	讀譜力
pp, ff	聽覺練習
合唱	獨唱
合唱	發聲
感情の一致	九十九頁
(下) 精神の鍛練	公會に於ける唱歌
すべき事	態度
日常の注意	食物、寐起、空氣、精神の快不快
(食物、寐起、空氣、精神の快不快)	身体の温度に注意す
べき事	演奏會或は唱歌時に於ける注意
(演奏會或は唱歌時に於ける注意)	食事、身体の快不快、
壯、疲勞、唱歌時の感情、室内の温度、光景	感情と發想
附錄 質疑應答	百十九頁

# 唱歌法大要 上卷

## 第一章

青木 兒 著

### 緒言

抑も唱歌とは如何なるものなるか云ふに、人聲を以て歌を謠ふと答ふる他なかるべし、然ども吾人が現時に於て唱歌と指すものは之多く西洋歌曲を採り、或は泰西音樂の方式に宛嵌て作れる歌曲に限れるが如き感あるは如何なる故にや、誰人も淨瑠璃を指して唱歌と云ふ者なく、馬子の追分を聞きて唱歌と呼ぶものもなかるべし、さらば之等の音聲を用ひて樂器に合せ或感情を發表するもの、或は單獨に上下抑揚即ち節を附して、歌詞を現はすものには何と別

名を附せざるべからず。

西洋音樂の種類を二大別して聲樂、器樂、とす、而して聲音の美を以て音樂を成すもの總て之を聲樂と云ひ、人爲に依りて作られたる器物即ち樂器を用ひ、之れに依りて樂を奏するものを器樂とす、之を音樂に於ける二大區別とすれば東洋に於ける淨瑠璃、長唄、さては馬子の歌に至るまで凡て音聲に依りて音樂的感情を表すものは、前述の聲樂中に數へざるべからざる也。

人ありて、長唄、淨瑠璃、謠曲、或は鄙歌の類に至るまで、即ち吾國に於ける音聲の樂は、是れを音樂と云ふ能ず、その價值なしと強ひて論ずるものあらば、余は暫く其人の議論に任せん、然れども余は信ず聲樂にして未だ發達せざるものあるのみ。

故に唱歌とは聲樂の別名にして、之れを演ずるものを唱歌者、聲樂家と稱す、前者は單に一般を指すもの、如く、後者は専門家を云ふが如し。余が以下章を追ふて、述べんとする所のものは、音樂としての一般にあらず、吾人の普通呼ぶ所の唱歌即ち泰西に於ける聲樂のみに就て也、讀者之れを諒せられよ。

既に唱歌が音樂に於ける二大別の一つたる事を知らば、其價直も亦輕からざるを察知すべき也、實に聲樂は人間天稟の技能に出づるものにして器樂の如く、人爲に依り、機器の精粗に依りて音を變ぜしむる事能はず、余は是處に敢て、聲樂と器樂の優劣を論ずるを好まず否、論ずる事の至難なるを感ずれども、兎に角、樂器に於ては投ずる處の黃白多ければ精巧の樂器を得べく從て其音も玲瓏、よく人心を感ぜし



むるものあるべきも聲樂に於ては然らず、其基本たる樂器  
とも云ふべき咽喉は美聲を得るに數多の練磨を経ざるべ  
からざるにあらずや、又樂器の多くは左程に外界の刺激を  
恐れざるも、聲樂家が氣候に注意し、食事を慎しむ、寒冷を恐  
る、の甚だしきは以て比すべきものあらざるなり。

現今吾國に於ける聲樂家が如何なる經驗を有し居るや、余  
は未だ之を詳かにせずと雖も、多くの唱歌者は、其の聲音  
を保持する爲め、或は益々美聲を得んが爲め如何なる注意  
をなし居るにや、余は實に疑はずんばあるべからざる多く  
の事實を知れり、世に音樂家なるものあり、しきりに唱歌を  
子弟に授く、而して唱歌の何物たるを知らず、人聲の如何な  
るものなるやを考へずして之をみだりにし、單に其歌を教  
へ、曲を傳ふるに過ぎざるものあるは、實に慨嘆すべきの限

りにあらずや、余は敢て他人を難ずるにはあらず、先輩をそ  
しるにあらず、と雖も、せめて聲樂なるものを研究せんとの  
志望を有されん事を希望して止まざるなり。

聲樂なるものが發達進歩せず、今日に至りて尙ほ遅々たる  
は之れ誰れの罪や、唱歌は單に子女童幼の、慰籍物として  
社會に輕々視されつ、あるは之何人の過失や、嗚呼余は是  
處に慙汗背を霑すを覺ゆるなり、余輩音樂者として社會  
に目さるもの實に之れが責を受けて謝せざるべからず、殊  
に余は後進淺學無能の徒に屬すと雖も、一度聲樂を專攻  
したるの事實あるが故に、又其責務余が頭上にあるを感じ  
てやまざるなり、慨するのあまり、筆端を無益に費したるは、  
識者の前に深く恥づる處なり、讀者幸に笑ふ勿れ。

事物を學ぶに順序あり、孔子曰く、物本末あり、事終始あり、其

前後する處を知らば即ち道に近しとされば唱歌せんとするにも亦知らざるべからざる方法あり、之を唱歌法と云ふ、余が本書に説かんとするものは其大要にして之れを以て盡せりとすべからず、然れども此等の方法を参考として研究する事怠たらざれば其間自から發達する處あるべきを信ず。讀者よ、諸子は既に唱歌法の必要なる事を自覺し居らるべきも尙暫く余をして余が幼時に於ける、多少の經驗を語らしめよ。

余が唱歌を好みて日常之を口にするに至りしは、十二三歳の頃なりき、而して余の叔父も亦唱歌を好みしを以て、屢々余をしてオルガンを奏せしめ、自から低音を唱歌せられき、余は止むを得ず高音を歌ふを常とせしが、恰も變聲の期に當り余は其注意を知らずして咽喉を害し爲めに出血せし

事數回ありき、然れども幸にして大事に至らず十六七才の頃に至りてはますます熱心に練聲を試みたり、曾て一旦上京して某校に學べる時などは、非常の熱心にて殆んど狂人の如く、日夜只アアを以て發聲のみを練習したりき、其街路を通行する際の如きも、夜間警官の巡回に會して叱聲を受くるに至らざる限りは常に何かの歌を而も大聲に放歌せざる事なかりき、當時余が最も練聲の好場所として愛せしは、彼の垢塵萬丈の銀座街頭にてありき、蓋し銀座は晝夜共車馬往來の音、轟々として、余が如何程大聲を發しても左程に通行の人を驚かさず、且又往來織るが如くなるを以て久しく余が聲を聞くものなし、從て警官の叱責なかりしを以てなり。

其後余は歸國して家庭に病を療養せし折、あまりに余が狂

人の如くなるを以て、近隣稱して眞の狂人となせり余に妹あり市の小學校に通學し居りしが其友人の母、彼れに戒しめて云く、青木氏の宅に遊ぶ勿れ、彼の兄は狂人なればなり、其家は余が屋敷を去る八丁餘、中間田畑にして余が練聲の聲常に風に依りて誘はるればなり偶々散歩の爲めに田畑に出で道路に従がつて行くや常に放歌して止む時なきを見て、田畑の人衆を立て互に指示し笑つて曰く、狂人よ！其兒童等之を知り背後に來り聲を揚げて笑ふ、時に省みて大喝呼ぶあれば兒童等相伴なつて走り、狂となしてまゝ笑ふ。

余が熱心精勵の度實に如斯にして、而して其日月は八年の長きに亘りたるも一つの得る處なかりき、之蓋し其方法を知らずして徒らに聲を費せしを以てなりき、其後僅々三四年の間に於て得たる所と多大の差ある事を發見しては實に唱歌法の欠くべからざる証して餘りありと云ふべきなり。余は尙終りに一言せんとする事あり嘗て北米に於て世界大博覽會の開設せられて之が開會式の當日會衆無慮十三萬人、十數個所に數十人宛の樂隊を狹みて米國の國歌を歌ひしと云ふ、其聲遠く數里に聞ゆ實に建國以來未曾有の事なりしと、噫盛なる哉。余は之を聞き吾國の情態を省りみて恥づる處なき能はざるなり、

人と成り一家を設け、社會に出づるに至れば、音聲の事は悉く廢して唱歌を口にせんともせず、天長の賀節に祝歌を唱ひ、公會の式場に君が代を祝ひ奉るの人、否奉賀し得るの人、果して幾何かある、酒宴の席に出で、は俗謠を唱ひ、軍歌を唱し、詩を吟じて得々たるの人あり、敢て問ふ其人國家の大

祭には如何に。

身は教育家の位置にあり、朝夕子弟を教へて、而して式日に當り、其子弟と共に奉祝の意を口にする能はざるの人なしと云ふべからず。乞ふ大方の諸氏、余が言の非禮を咎めずして幸に一考せられよ、本書の首章に當り亂文非禮、言を大方の識者に寄せたるは著者兒、再拜して謝する所なり

# 第

# 表

記音		譜表ノ最初ニ於ケル記號ハ高音部記號ト稱シ此ノ譜表ニサプラノ、アルト、ヲ記載ス、或ハテノルヲモ記ス事アリ	
		譜表ノ最初ニアル記號ハ低音部記號ト稱シ此ノ譜表ニテノル、ベース、ヲ記載ス。	
音名	イロハニホヘト	日本ニ於ケル音名ナリ。	
	a b c d e f g	英名ヲ以テセル音名エー、ビー、シー、デー、イー、エフ、ジー。	
	a h c d e f g	獨逸文字ナレド假ニ英字ヲ用ユ、ア、ハ、ハー、チ、デー、エー、エフ、ゲー。	
相當符		全音符ニシテ之ニ相當セル默符ハ	
		二分音符ニシテ全音符ノ1/2ナリ相當默符ハ	
		四分音符ニシテ全音符ノ1/4ナリ相當默符ハ	
		八分音符ニシテ全音符ノ1/8ナリ相當默符ハ	
		十六分音符ニシテ全音符ノ1/16ナリ相當默符ハ	
		三十二分音符ニシテ全音符ノ1/32ナリ相當默符ハ	
附點			
音符			

反復記號	第一種		前三小節ヲ反復シテ次ニ遷ルモノ(即チ三小節ト定ム)	
	第二種		後三小節ヲ反復シテ終ルモノ(全上)	
	第三種		前三小節ヲ反復シテ又更ラニ後三小節ヲ反復ス(全上)	
拍子	平等	二拍子	$\frac{2}{2}$ 或ハ $\mathcal{C}$	一小節間 = $\frac{1}{2}$ 音符二個若シクバ之ト同價ノ音符ヲ有セル拍子ナリ。
		四拍子	$\frac{2}{4}$	一小節間 = $\frac{1}{4}$ 音符二個若シクバ之ト同價ノ音符ヲ有セル拍子ナリ。
	不平等	四拍子	$\frac{4}{4}$ 或ハ $\mathcal{C}$	一小節間 = $\frac{1}{4}$ 音符四個若シクバ之ト同價ノ音符ヲ有セル拍子ナリ。
		六拍子	$\frac{4}{8}$	一小節間 = $\frac{1}{8}$ 音符四個若シクバ之ト同價ノ音符ヲ有セル拍子ナリ。
	變拍子	三拍子	$\frac{3}{2}$	一小節間 = $\frac{1}{2}$ 音符三個若シクバ之ト同價ノ音符ヲ有セル拍子ナリ。
		三拍子	$\frac{3}{4}$	一小節間 = $\frac{1}{4}$ 音符三個若シクバ之ト同價ノ音符ヲ有セル拍子ナリ。
		六拍子	$\frac{3}{8}$	一小節間 = $\frac{1}{8}$ 音符三個若シクバ之ト同價ノ音符ヲ有セル拍子ナリ。
		六拍子	$\frac{6}{8}$	一小節間 = $\frac{1}{8}$ 音符六個若シクバ之ト同價ノ音符ヲ有セル拍子ナリ。
	變拍子	六拍子	$\frac{6}{4}$	一小節間 = $\frac{1}{4}$ 音符六個若シクバ之ト同價ノ音符ヲ有セル拍子ナリ。
		變拍子		變拍子トハ四分ノ音符三個又ハ八部音符三個ヲ同種音符二個ト同歷時ヲ保タシムルモノニシテコノ場合ニハ三個ヲ連台シテ3ノ數字ト括弧トヲ附記スルモノナリ
雜記號	頓點		圓點ハ樂曲ノアル音聲ヲ分離鮮明ニ奏唱スベキ時其音符ノ上或ハ下ニ附スル記號ナリ	
	乘點		乘點ハ圓點ヨリ更ニ其結果ノ著シキモノニシテ此記號ヲ用ユル場合ニハ四分音符ハ恰モ八分音符ノゴトクスベシ	
	連結		連結トハ圓滑ニ奏唱スベキ音符ヲ示ス弧線ニシテ其部分ノ上又ハ下ニ附スル記號ナリ伊太利語ノレガートニ同ジ	
	延聲		延聲記號トハ或ル音符若シクバ默符ヲ其音程有ノ時價ナリ時ニ	

記音		譜表ノ最初ニ於ケル記號ハ高音部記號ト稱シ此ノ譜表ニサブラノ.アルト.ヲ記載ス.或ハテノルヲモ記ス事アリ	
		譜表ノ最初ニアル記號ハ低音部記號ト稱シ此ノ譜表ニテノル.ベ-ス.ヲ記載ス.	
音名	イ ロ ハ ニ ホ ヘ ト	日本ニ於ケル音名ナリ.	
	a b c d e f g	英名ヲ以テセル音名ニ.ピ-.シ-.デ-.イ-.エフ.デー.	
	a h c d e f g	獨逸文字ナレド假ニ英字ヲ用ユ.ア-.ハ-.チエ-.デー.エ-.エフ.デー.	
相並單當純默音符		全音符ニシテ之ニ相當セル默符ハ	
		二分音符ニシテ全音符ノ1/2ナリ相當默符ハ	
		四分音符ニシテ全音符ノ1/4ナリ相當默符ハ	
		八分音符ニシテ全音符ノ1/8ナリ相當默符ハ	
		十六分音符ニシテ全音符ノ1/16ナリ相當默符ハ	
附點音符			

反復記號	一		後三小節ヲ反復シテ終ルモノ(全上)
	二		前三小節ヲ反復シ又更ラニ後三小節ヲ反復ス(全上)
	三		最初ノ五小節ヲ奏シ更ニ之ヲ反復シテ「ア」ノ所ニ至ラバ此二小節ヲ越エテ「カ」ニ至ルナリ。
拍子	二等拍子	二拍子 $\frac{2}{2}$ 或ハ $\text{C}$	一小節間 = $\frac{1}{2}$ 音符二個若シクバ之ト同價ノ音符ヲ有セル拍子ナリ。
		四拍子 $\frac{2}{4}$	一小節間 = $\frac{1}{4}$ 音符二個若シクバ之ト同價ノ音符ヲ有セル拍子ナリ。
	四拍子	$\frac{4}{4}$ 或ハ $\text{C}$	一小節間 = $\frac{1}{4}$ 音符四個若シクバ之ト同價ノ音符ヲ有セル拍子ナリ。
		$\frac{4}{8}$	一小節間 = $\frac{1}{8}$ 音符四個若シクバ之ト同價ノ音符ヲ有セル拍子ナリ。
	不等拍子	三拍子 $\frac{3}{2}$	一小節間 = $\frac{1}{2}$ 音符三個若シクバ之ト同價ノ音符ヲ有セル拍子ナリ。
		四拍子 $\frac{3}{4}$	一小節間 = $\frac{1}{4}$ 音符三個若シクバ之ト同價ノ音符ヲ有セル拍子ナリ。
		六拍子 $\frac{3}{8}$	一小節間 = $\frac{1}{8}$ 音符三個若シクバ之ト同價ノ音符ヲ有セル拍子ナリ。
	變拍子	六拍子 $\frac{6}{8}$	一小節間 = $\frac{1}{8}$ 音符六個若シクバ之ト同價ノ音符ヲ有セル拍子ナリ。
		四拍子 $\frac{6}{4}$	一小節間 = $\frac{1}{4}$ 音符六個若シクバ之ト同價ノ音符ヲ有セル拍子ナリ。
	雜記號	頓點	
重點			圓點ハ樂曲ノアル音聲ヲ分離鮮明ニ奏唱スベキ時其音符ノ上或ハ下ニ附スル記號ナリ
連結			垂點ハ圓點ヨリ更ニ其結果ノ著シキモノニシテ此記號ヲ用ユル場合ニハ四分音符ハ恰モ八分音符ノゴトクスペシ
延聲			連結トハ圓滑ニ奏唱スベキ音符ヲ示ス弧線ニシテ其部分ノ上又ハ下ニ附スル記號ナリ伊太利語ノレガートニ同ジ

## 第二章

本章に於ては唱歌に必要な樂典の大畧を記述すべし。余は之を一々論述せず讀者の便に供せんが爲め悉く表を以て記載したれば今表に就て説明せんぞす。

### 第一表

音部記號　普通の單音唱歌には高音部譜表を用ひ、二部、三部、等には多く高音部譜表を二段に用ひ、上段に高音、下段に中音を記す、或は上段に最高音及高音を記し、下段に中音を記す事あり、又三部合唱の時には、上二音には高音部譜表を用ひ、低音は低音部譜表を用ひて男聲をなしたるものあり、四部合唱には高音部譜表に高音、中音を記し、低音部譜表には次中音、低音を記載す、又高尙なる聲樂の

合唱中には五部六部なる合唱もありて、之れ等は連合大譜表にて譜表を數段に合したるものあり、而して此際には次中音を、高音部譜表にて表はす事あり、又最高音、高音、中音、等の獨唱は高音部譜表を以て表し、次中音、低音、最低音、等の獨唱には低音部譜表を用ふ。然れども時には、高音と次中音、中音と低音は便宜上同一なる譜表を用ひ、高音部に記載する事あり。此線と間の音名は第四表に就て見るべし。

音名 音の絶對的高度に附せられたる名稱にして、萬國大概其高度を等ふせり、然れども最も普通のもの、インターナショナル、ピッチ、と稱し、一つは、コンサート、ピッチと稱して前者より約半音近き高度の差を有せり、曾て佛國に於て萬國音樂家會議を開きし折にA(イ音)なる音を四

百三十五振動と定められ、一千八百五十九年二月(四十六年程前)文部省令を以て發布せられたるものは即ちインターナショナル、ピッチなり。萬國之に従ふべきなれども未だ悉く一定せずされば唱歌せんとするに際しては豫め其伴奏樂器のピッチ、を聞き置かざれば大に失敗を招く事あり。

獨逸文字(假に英字を用ふ)に於ての「B」は英字の「B」の半音下降したるもの即ち「Bb」にして獨逸にては英字の「B」に代ふるに「H」を以てせり。

音符 別に説明を附せず、只之は音の歷時を表すの用をなすのみ。

黙符 從來休止符と稱し來りたるものなれども、實際樂曲の休止したるに非らざる故に現今に於ては一般にか



く改められたり。

反復記號 之は一樂曲中或一部が同一なる時に其繁雜を避けんが爲めに用ひたるものなり。

拍子 表中のものは最も普通のものにして此他尙種類多けれざ畧しぬ。

變拍子 當分し能はざる拍子を表す爲に之に最も近き種類の音符を用ひたるなり。



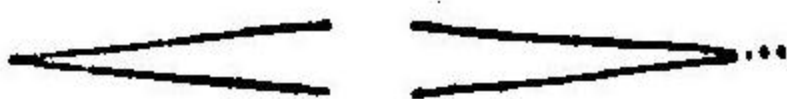
雜記號 此記號中延長記號は普通音符の二倍位に延長するものなれど、實は唱者の任意になすべきものなり。

第二表

強弱記號 之は伊太利語を以て表はされたるものなり。

緩急記號 同前にして別に記する事なし。只之も亦感情上より來りたる發相なれば人に依り、感情により毫も差

強弱記號

- P. (Piano) ピアノ ..... 弱
- PP. (Pianissimo) ピアニシモ ..... 最弱
- mP. (Mezzo piano) メツゾ ピアノ ..... 中弱
- mf. (Mezzo forte) メツゾ フアルテ ..... 中強
- f. (forte) フアルテ ..... 強
- ff. (fortissimo) フアルチシモ ..... 最強
- Cresc. 又は  (Crescendo) ..... 漸次に強く
- Decresc. 又は  (Decrescendo) ..... 漸次に弱く
-  ..... 前二記號を合一したるもの
- Sf. > 又は < (sforzando) ..... 特別に強く

緩急記號

- Accel. (Accelerando) ..... 漸次に急速
- Rall. (Rallentando) ..... 漸次に緩徐
- Rit. (Ritardando) ..... 漸次に緩延
- Cal. (Calando) ..... 漸次に緩靜
- A tempo ..... 本来の速度

速度記號

- Grave ..... } 極めて緩徐
- Leto. .... }
- Largo. (Larghetto) ..... } 最も緩徐
- Adagio. .... }
- Andante. (Andantino) ..... 稍や緩徐
- Moderato ..... 中等の速度
- Allegro. (Allegretto) ..... 急速
- Presto. (Prestissimo) ..... 極めて急速

變化記號

- 嬰記號  $\sharp$ . 重嬰  $\sharp\sharp$  又は  $\times$  ..... 嬰は某音を半音上げ、更に半音を上げるには重嬰を用ふ。
- 變記號  $\flat$ . 重變  $\flat\flat$  ..... 變は某音を半音下げ、更に半音を下げるには重變を用ふ。
- 本位記號  $\square$  ..... 嬰或は變を消除せしめて其音本来の位地に復せしむ。

調號表

(1) (2) (3)

嬰種 

各調  $\left[ \begin{matrix} \text{ト調} \\ \text{ニ調} \\ \text{イ調} \\ \text{ホ調} \\ \text{ロ調} \\ \text{嬰調} \\ \text{嬰調} \end{matrix} \right]$

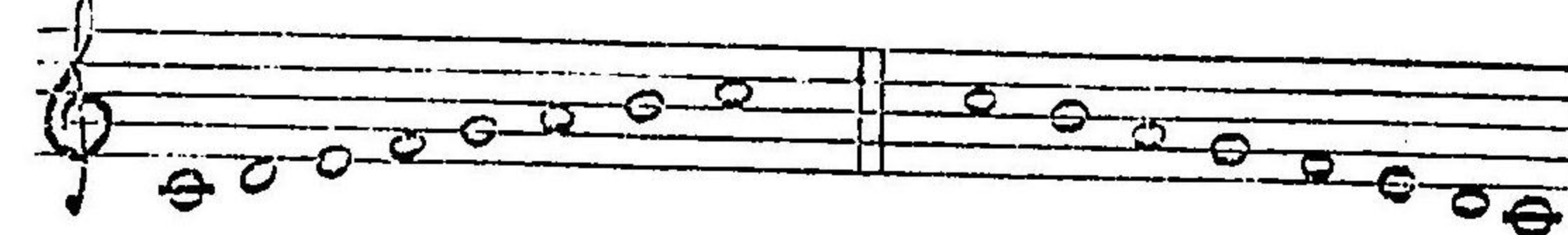
注意 { (1)  $\rightarrow$  (1)  $\rightarrow$  (2)  $\rightarrow$  (2)  $\rightarrow$  (3)  $\rightarrow$  (3)  $\rightarrow$  河レモ記號ハ異ナレモ }  
有鍵器樂ニ於テハ實際全ナル鍵ヲ用フルモノナリ


(3) (2) (1)

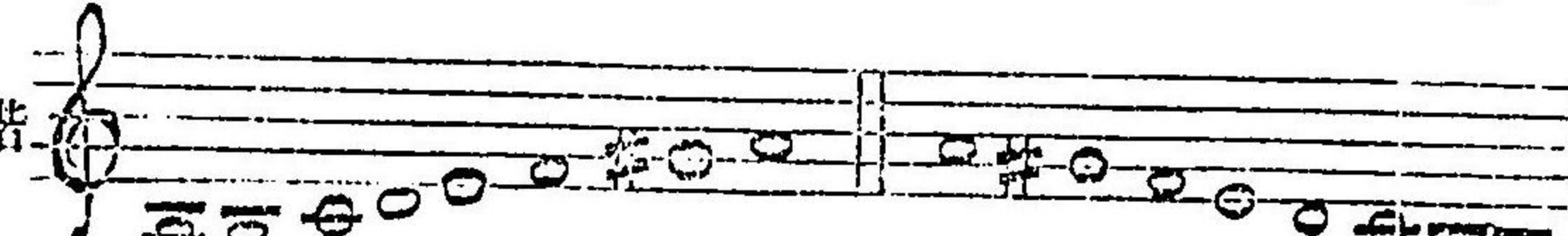
變種 

各調  $\left[ \begin{matrix} \text{ニ調} \\ \text{變調} \\ \text{變調} \\ \text{變調} \\ \text{變調} \\ \text{變調} \\ \text{變調} \end{matrix} \right]$


長短音階の形狀

長音階 


旋律的短音階 


和聲的短音階 

半音階の形狀



絃飾音

書法 

唱法 

- P. (Piano) ピアノ ..... 弱
- PP. (Pianissimo) ピアニシモ ..... 最弱
- mP. (Mezzo piano) メツゾ ピアノ ..... 中弱
- mf. (Mezzo forte) メツゾ フアルテ ..... 中強
- f. (forte) フアルテ ..... 強
- ff. (fortissimo) フアルチシモ ..... 最強
- Cresc. 又は  $\text{<}$  (Crescendo) ..... 漸次に強く
- Decresc. 又は  $\text{>}$  (Decresendo) ..... 漸次に弱く
- $\text{<}$   $\text{>}$  ..... 前二記號を合一したるもの
- Sf.  $\text{>}$  又は  $\text{<}$  (sforzando) ..... 特別に強く

**緩急記號**

- Accel. (Accelerando) ..... 漸次に急速
- Rall. (Rallentando) ..... 漸次に緩徐
- Rit. (Ritardando) ..... 漸次に緩延
- Cal. (Calando) ..... 漸次に緩静
- A tempo ..... 本来の速度

**速度記號**

- Grave ..... } 極めて緩徐
- Leto. .... }
- Largo. (Larghetto) ..... } 最も緩徐
- Adagio. .... }
- Andante. (Andantino) ..... 稍や緩徐
- Moderato. .... 中等の速度
- Allegro. (Allegretto) ..... 急速
- Presto. (Prestissimo) ..... 極めて急速

**變化記號**

- 嬰記號  $\sharp$ . 重嬰  $\sharp\sharp$  又は  $\times$  ..... 嬰は某音を半音上げ. 更に半音を上げるには重嬰を用ふ。
- 變記號  $\flat$ . 重變  $\flat\flat$  ..... 變は某音を半音下げ. 更に半音を下げるには重變を用ふ。
- 本位記號  $\square$  ..... 嬰或は變を消除せしめて其音本来の位地に復せしむ。

**調號表**

嬰種

各調  $\square$  調  $\square$  調  $\square$  調  $\square$  調  $\square$  調  $\square$  調  $\square$  調

注意 { (1)  $\flat$  (1)  $\flat$  (2)  $\flat$  (2)  $\flat$  (3)  $\flat$  (3)  $\flat$  河レモ記號ハ異ナレモ }  
 { 有鍵器樂ニ於テハ實際全ナル鍵ヲ用フルモノナリ }

變種

各調  $\square$  調  $\square$  變調  $\square$  變調  $\square$  變調  $\square$  變調  $\square$  變調  $\square$  變調

**長短音階の形狀**

長音階

旋律的短音階

和聲的短音階

**半音階の形狀**

**絃飾音**

書法

唱法

異なしとは云ふべからず。

速度記號 最速度一分間に約二百拍、最遅きもの全約四十拍とす、然ども其正確なるものに至りては名人も殆んど能くし難し。拍節機なるものありて其拍數を一定せられあり。

變化記號 有鍵樂器に於ては變も嬰も同一鍵なれども理論上は多少の差異あるべきものなり。

嬰種諸調 模範的音階即「ハ」調音階より上行五度の處に主調音をとりて一音階を構成し、之を「ト」調とし、又此主調音即ち「ト」より上行五度に主調音をとりて一音階を構成し、かくて順次に五度を追ふて上行的に構成せられたる音階をして、模範的音階に於ける諸音の排列と同一ならしめんが爲めに順次新音階の第七音に嬰を附したるも

のなり。

變種諸調

模範的音階即ち「ハ」調音階より下行五度の處に主調音をとりて一音階を構成し之を「ヘ」調とし、又此主調音即ち「ヘ」より下行五度に主調音をとりて一音階を構成し、かくて順次に下行的に構成せられたる音階をして模範的音階に於ける諸音の排列と同一ならしめんが爲めに、順次新音階の第四音に變を附したるものなり。

音階各種

音階に二種あり、長音階及び短音階之なり。長音階は快活勇壯にして、短音階は沈鬱悲哀なり。而して短音階に二種あり、施律的及び和聲的之なり。此表は單に「ハ」調及「イ」調に於ける長短の音階を表して音の排列を示したるのみ。

半音階

之は初めもなく、終りもなき半音の一系列なり。

# 第

# 三

# 表

## 普通音程各種

○注意  
1は一全音、1/2は  
半音に相当する。

※ 一度音程



○注意、※は完全協和音

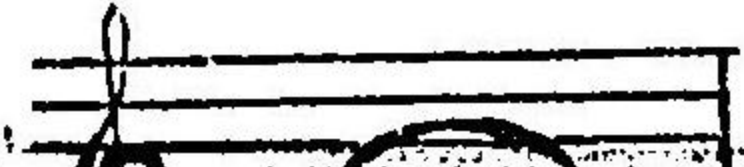
長二度音程△

1



短二度音程△

1/2

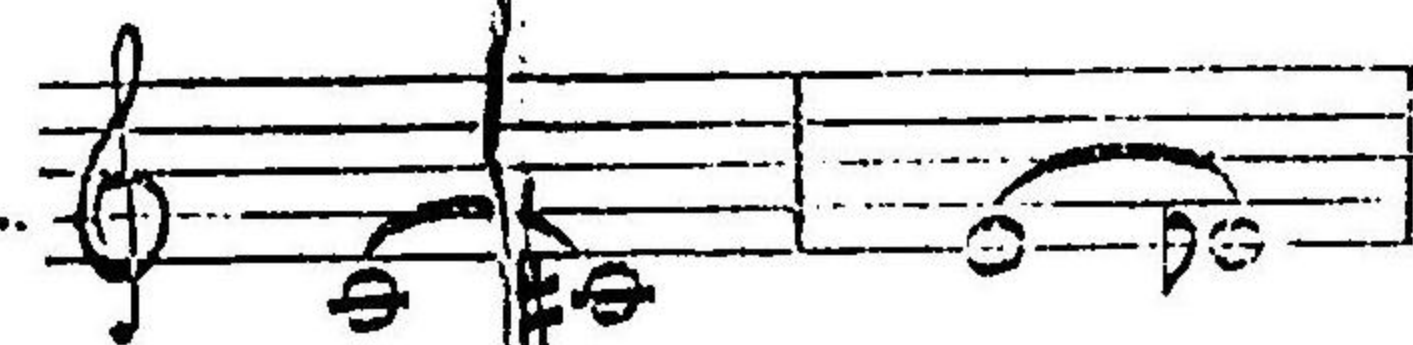


## 半音階的諸音程 (變体音程トモ稱ス)

○注意、此諸音程ハ悉ク

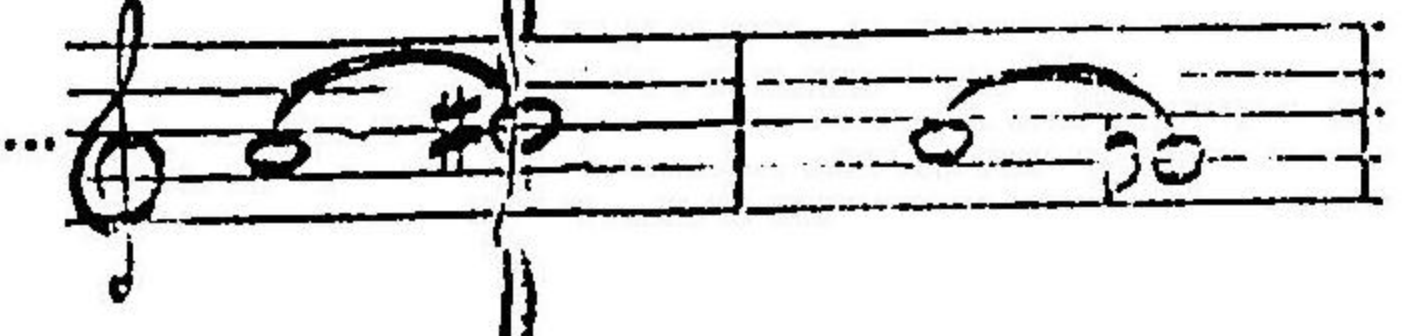
増一度音程

$1\frac{1}{2}$



増二度音程

$1+\frac{1}{2}$



増三度音程

$\frac{1}{2}+\frac{1}{2}$



1は全音、1/2は普通半音、1/4は半音階的半音(總体半音)而して之は單に全音と、半音の數を示したるものにして排列の如何には關せざるなり。

長二度音程△	1	
短二度音程△	1/2	
× 長三度音程	1+1	
× 短三度音程	1+1/2	
※ 完全四度音程	1+1+1/2	
増四度音程△	1+1+1	
※ 完全五度音程	1+1+1/2+1	
減五度音程△	1/2+1+1+1/2	
× 長六度音程	1+1+1/2+1+1	
× 短六度音程	1/2+1+1+1+1/2	
長七度音程△	1+1+1/2+1+1+1	
短七度音程△	1+1/2+1+1+1+1/2	
※ 完全八度音程	1+1+1/2+1+1+1+1/2	

注意、※は完全協和音程。×は不完全協和音程。△は不協和音程。

増一度音程	1/2	
増二度音程	1+1/2	
増三度音程	1/2+1/2	
減四度音程(不及)	1/2+1/2+1	
増五度音程(超過)	1+1+1+1/2+1/2	
増六度音程	1+1+1+1+1/2+1/2	
減七度音程	1/2+1/2+1+1+1+1/2	
不及八度音程	1/2+1+1/2+1+1+1+1/2	

注意、此諸音程ハ悉ク不協和音程ナリ。

音程の轉回

原	轉	原	轉	
				9-5=4 9-8=1}完全
完五原	完四轉	完八原	完二轉	
				9-長3=短6 9-短3=長6
長三原	短六轉	短三原	長六轉	
				9-増4=減5 9-減5=増4
増四	減五	減五	増四	
原音程	12345678	は		
轉回音程	87654321	となる		

注意  
9の數より度數を減せば其轉回和絃の度數を得べく、原音程の増は減となり。短は長となる事左の如し。而して完全は常に完全なり。

裝飾音 施律の裝飾に用ひらるゝものにして、獨唱中往々あり。

第三表

音程 普通音程、十四種は樂曲中普通に現出する音程にして、此圖に表はしたるは悉く「ハ」調を以てせるなり。協和音とは同時に響きたる異なりたる音が相和し、優美雅正にして人耳に快感を與ふるものを云ふ。不協和音は之に反す。半音階的諸音程、は臨時記號なくしては起らざるものにして凡て不協和音程なり。音程轉回 之れは普通唱歌するにはさして必要なるものにめらざれども、音程に關係あるを以て是處に載せたり。其詳細なるに至りては諸氏よろしく樂曲に就て見ら



るべし。

第四表

オルガン鍵盤圖解 中央「ハ」音より上方「ロ」に至るまでを無點と定められ(現今普通の樂曲に依る、之より上方は一音階毎に音名の上有一點づ、を加へ、又中央「ハ」音より下は一音階毎に音名の下に一點宛を附加す、之の圖は單に音名を示さんが爲めなるを以て略せり。

人聲區域 人聲を分ちて四部となすは最も普通なれど、之を専門的に區分すれば六部となる、即ち該表に於けるが如し。表中普通以上と稱する音域は稀にある處にして實に天與の音聲と云ふを得べし。本表は東京音樂學校に於て音響學を教授せらるゝ、余が舊師、上原六四郎先生の調査せられし處に因る。

# 五連八音オルガン鍵盤

## 人聲區域

<p>最高音</p> <p>普通以上</p> <p>振動數 218.....1044      196.....1305</p>	<p>最低音</p> <p>普通以上</p> <p>振動數 82.....293      61.....348</p>
<p>高音</p> <p>普通以上</p> <p>振動數 174.....870      164.....977</p>	<p>次中音</p> <p>普通以上</p> <p>振動數 109.....435      98.....544</p>
<p>中音</p> <p>普通以上</p> <p>振動數 164.....696      110.....870</p>	<p>低音</p> <p>普通以上</p> <p>振動數 87.....370      73.....392</p>

注意  
 甲圖は現今の樂典  
 書中にある表にし  
 て吾國に於ける最  
 普通の人聲區域と  
 す。  
 本表に於ける區域  
 は殆んど信じ難き  
 が如くなれば實際  
 人聲を分てば斯の  
 如くなるを以て之  
 に載せたり。

# 五連八音オルガン鍵盤

## 人聲區域

<p>最高音</p> <p>振動數 218.....1044      196.....1305</p>	<p>普通以上</p>	<p>最低音</p> <p>振動數 82.....293      61.....348</p>	<p>普通以上</p>
<p>高音</p> <p>振動數 174.....870      164.....977</p>	<p>普通以上</p>	<p>次中音</p> <p>振動數 109.....435      98.....544</p>	<p>普通以上</p>
<p>中音</p> <p>振動數 164.....696      110.....870</p>	<p>普通以上</p>	<p>低音</p> <p>振動數 87.....370      73.....392</p>	<p>普通以上</p>

注意  
 甲國は現今の樂典  
 書中にある表にし  
 て吾國に於ける最  
 普通の人聲區域と  
 す。  
 本表に於ける區域  
 は殆んど信じ難き  
 が如くなれど實際  
 人聲を分てば斯の  
 如くなるを以て之  
 に載せたり。

尙進んで研究せんとする諸氏に對し左に參考書の二三を紹介せん

近世樂典教科書

田村虎藏氏

新式樂典教科書

近森出來治氏

音樂問答

文部省

樂典教科書

入江好次郎氏

樂典初步

文部省

樂典

文部省

音樂教科書

白井規矩郎氏

新撰樂典大要

石原重雄氏

### 第三章

普通唱歌法に必要な器譜、……獨習者に向つての注意……聴覚練習……發聲……練習の方法……注意

第四章上  
トニツクソルフアの器譜の項  
参照

唱歌法に普通と高等との區別あるにあらねど、其方法を説くに章を分ちしは讀者の解し易からんを思ひてなり、余が普通唱歌法と指すものは通常小學校に於て教授するの程度を意味するものにして最も簡單なるものなり、之等の事を説くに先だち、諸子の知らざるべからざるは器譜の一事にして、今以下に之を示さん、  
器譜に二種あり、一つはトニツクソルフア、に於て用ふる器譜にして英字を綴りたるものを以てし、一つは最も普通用ゆるものにして、1 2 3 の數字を以てせるものなり、

トニツクソルフアの器譜は後章高等唱歌法の部分に於て説くべければ、是處には單に 1 2 3 の器譜をのみ説明すべし。

音階

悉て音階の音を分ちて七種とす、即ち下方より呼びて

7 6 5 4 3 2 1

とす一より二、二より三、と其數の増すに従ひ漸次高度に達するものなり、而して 7 に至り尙上昇せんとする場合には再び 1 2 3 と前數字を繰り返す、但し此場合に於ては下のものと區別せんがために數字の上有一點を附す、

7̇ 6 5 4 3 2 1.....

又前無點の數字の音階よりも下に音を要する時には其數字の下に一點を附すものとす、

7̇ 6̇ 5̇ 4̇ 3̇ 2̇ 1̇



順を追ふて之を以上述べたる所によつて畧其音階各音の高度と其稱呼を辨へたれば次ぎには拍子なるものに説及ぶべし、

畧譜に於ける拍子は横線と、點とを以て表はす、左表の如し今假りに1、の一音を以てこれを表示すべし、

音符に於ては

全音符	.....	1—1—
二部音符	.....	1—
四部音符	.....	1
八部音符	.....	1
十六部音符	.....	1

黙符(休止符)に於ては

全黙符	.....	0—0—
二部黙符	.....	0—
四部黙符	.....	0
八部黙符	.....	0
十六部黙符	.....	0

此等の音符によりて一曲の骨子を記するを得べし、而して尙ほ之れに加ふるに必要な發相に諸記號を記せば即ち、

ヨ	ヨ	.....	最も弱く。
ヨ	ヨ	.....	弱く。
チ	ヨ	.....	中位の弱。
チ	ツ	.....	中位の強。
ッ	.....	.....	強。
ッ	.....	.....	最も強。
シ	ツ	.....	次第に強く。
シ	ヨ	.....	次第に弱く。

其他○なる記號を音符の上  
に附する事あり之は本  
符にスタツカイトなり、

其他の諸記號は本譜に於けると同一なるもの、或は之が譯字を以て表す事あり(曲中若し之等の語ある時には本書の術語表に就て研究せられよ)以上述べたる處に依つて略ぼ讀譜の力を得たりと云ふべきも、是處に尙注意すべき一事あり、

元來略譜なるものは或調に於ける基音(主調音)を1として之れより割出したるものなれば、其調の如何に依りては同一なる5、5、の兩音も實際の高度に於て非常なる差を生ずる事あり、例へば「ハ」調に於ける1は「ハ」音を以て之に當つれど「ト」調に於ける1は「ト」音即ち「ハ」の5に相當するが如し、故に略譜には必ず何調なる文字を其首部に附記せざるべからず

左に一例を示さん

(ハ調)  $\frac{4}{4}$  (或は四拍子)

ソ	レ	チ	ソ	レ	ソ	レ	ソ	レ
2123	532-	35656	2765	356-	212-	3565	352-	612-
ソ	レ	チ	ソ	レ	ソ	レ	ソ	レ
ソ	レ	チ	ソ	レ	ソ	レ	ソ	レ
ソ	レ	チ	ソ	レ	ソ	レ	ソ	レ
ソ	レ	チ	ソ	レ	ソ	レ	ソ	レ
ソ	レ	チ	ソ	レ	ソ	レ	ソ	レ
ソ	レ	チ	ソ	レ	ソ	レ	ソ	レ
ソ	レ	チ	ソ	レ	ソ	レ	ソ	レ
ソ	レ	チ	ソ	レ	ソ	レ	ソ	レ
ソ	レ	チ	ソ	レ	ソ	レ	ソ	レ
ソ	レ	チ	ソ	レ	ソ	レ	ソ	レ
ソ	レ	チ	ソ	レ	ソ	レ	ソ	レ
ソ	レ	チ	ソ	レ	ソ	レ	ソ	レ
ソ	レ	チ	ソ	レ	ソ	レ	ソ	レ
ソ	レ	チ	ソ	レ	ソ	レ	ソ	レ
ソ	レ	チ	ソ	レ	ソ	レ	ソ	レ
ソ	レ	チ	ソ	レ	ソ	レ	ソ	レ
ソ	レ	チ	ソ	レ	ソ	レ	ソ	レ
ソ	レ	チ	ソ	レ	ソ	レ	ソ	レ
ソ	レ	チ	ソ	レ	ソ	レ	ソ	レ
ソ	レ	チ	ソ	レ	ソ	レ	ソ	レ
ソ	レ	チ	ソ	レ	ソ	レ	ソ	レ
ソ	レ	チ	ソ	レ	ソ	レ	ソ	レ
ソ	レ	チ	ソ	レ	ソ	レ	ソ	レ
ソ	レ	チ	ソ	レ	ソ	レ	ソ	レ
ソ	レ	チ	ソ	レ	ソ	レ	ソ	レ
ソ	レ	チ	ソ	レ	ソ	レ	ソ	レ
ソ	レ	チ	ソ	レ	ソ	レ	ソ	レ
ソ	レ	チ	ソ	レ	ソ	レ	ソ	レ
ソ	レ	チ	ソ	レ	ソ	レ	ソ	レ
ソ	レ	チ	ソ	レ	ソ	レ	ソ	レ
ソ	レ	チ	ソ	レ	ソ	レ	ソ	レ
ソ	レ	チ	ソ	レ	ソ	レ	ソ	レ
ソ	レ	チ	ソ	レ	ソ	レ	ソ	レ
ソ	レ	チ	ソ	レ	ソ	レ	ソ	レ
ソ	レ	チ	ソ	レ	ソ	レ	ソ	レ
ソ	レ	チ	ソ	レ	ソ	レ	ソ	レ
ソ	レ	チ	ソ	レ	ソ	レ	ソ	レ
ソ	レ	チ	ソ	レ	ソ	レ	ソ	レ
ソ	レ	チ	ソ	レ	ソ	レ	ソ	レ
ソ	レ	チ	ソ	レ	ソ	レ	ソ	レ
ソ	レ	チ	ソ	レ	ソ	レ	ソ	レ
ソ	レ	チ	ソ	レ	ソ	レ	ソ	レ
ソ	レ	チ	ソ	レ	ソ	レ	ソ	レ
ソ	レ	チ	ソ	レ	ソ	レ	ソ	レ
ソ	レ	チ	ソ	レ	ソ	レ	ソ	レ
ソ	レ	チ	ソ	レ	ソ	レ	ソ	レ
ソ	レ	チ	ソ	レ	ソ	レ	ソ	レ



ども、止むなくんば他の樂器に就て練習するも可なるべしに依つて自己の音聲を音律的ならしむるものなり今オルガンを以て説かんに、最初オルガンの中央の音にて自己の音聲の最もよく發聲し得る高度(何音にてもよし)に於て、一音を發し、其高度を記憶し、更にオルガンに依らずして其高度を發聲するなり、此場合に於ては、ア、なる發聲を以て出來得る丈け長く、極めて平易に發聲すべし、其間或は高く、或は低くならざる様換言すれば最初發聲したるこ同一の高度を保持し得る様勉むべし例へば左圖に於ける甲は正確なる一高度の音なれど、乙は一發聲の時間中或時は高く、或時は低くなれるを示せるものにて之れ等は初學の人殊に注意すべき事なり、

發聲時



發聲時



かくて他の音に移り、樂器と聲と交互に音を出し、順次高く、或は低く練習すべし、但し此場合にはオルガン中の黒鍵は用ひざるを可とす、

かくて遂にはオルガンの一音を聽て、其隣音を發聲し、或は三音隔たりて、其高度を知るが如く漸次聽覺の發達を見るに至るべし。

之等の程度に達するには一朝の練習にあらずと雖も、其度を重ね修練を積むに至りて此境界に至るを得べし、只初學者に於ては倦まず怠らざるを要す、既にして其音聲が稍正

しき音律を作るに至れりご自覺したらんには更らに第二章及び、本章前述の畧譜に依りて漸次歌曲に及ぼすべし、先づ其方法は曲の性質簡單なるもの、例へば附點音符、十六分音符、八分音符等の音符少なき曲に就て熱心に練習すべし、而して此種の曲中にも拍子の取り易き四分の四拍子を撰ぶべし。

文部省編纂の小學唱歌集、伊澤修二氏の小學唱歌、等は初學者にこりては學び易き良書なるべし、蓋し此等の書は其歌曲の排列當を得たるが故なり、兩書中殊に文部省編纂の小學唱歌集は唱歌教授上、又練習上、實に良階梯なる書と云ふを得べし。

余は此良書が地方に於て殆んど用ひられず、甚しきは此書名だに知らざるものあるを歎く者なり其曲と云ひ歌詞と

云ひ採りて以て兒童の精神を養ふべきもの數多あるにも係らず、之を採用せんごはせざるなり、事他事に亘りたりご雖も一言是處に附記す。

更に獨習者に向つての注意を記さんに、少しく音聲を出し得るに至れば好んで高音を出さん事を力む、之一般の通弊と云ふべし、自己が果して如斯高音を有し居るや否やを確かめずして、しきりに大聲を發して高音を練習す、其熱心や嘉賞すべしご雖も人に依りては大に害を招くに至る事を記憶せざるべからず。

萬人必ずしも高音を有せずご云ふにはあらず、人に依りては反つて低音より高音を練習する方適當なる事あり、只無理なる聲、苦しき高度に於て長く練習するは害あつて益なき事ご知るべし。

第四章上  
練習の項  
参照

第二章の  
人聲區域  
を参照せ  
らるべし

大聲もまた然り、十分其方法を確めずして慢りに大聲を練習する時は反つて其聲を失ふに至るべし大聲を練習せんとする時は、必ず其音の初めより強聲を出す事なく、最初は弱く發聲し漸次強くし後又弱を以て終るべし、難事なれども少しく練習せば其加減を會得するに至るべし、其形は即ち  $\wedge$   $\vee$  の如く次第に強くし、次第に弱くすべきものなり（前述發想に用ふる諸記號の所にあり）

聲は純正なるを要するが故に他の雜音の混じたるが如き感あるは極めて不可なれば之を避けざるべからず、（俗に云ふガスくしたる聲、又はドラ聲、などの類を指すものなり）故に可成口を其ま、大きく開きて、舌端を以て聲を妨げざる様つとむべし、俗に「ハツキリ」したる聲など云ふは先づ其當を得たる發聲と云ふべし。

初學者に於て尙ほ一つの勉むべき事あり、それは氣息用法にして、其曲中氣息をつぐべき場所に至るまで（氣息記號なき歌曲に於ては其歌詞の句節に依る大概二小節位にあり）一息に連續せしむるを云ふなり、即ち長く一音を連續し得る方法を知れば足れり云ふべし、而して之は深呼吸をなす事、息を十分吸入して後ち或一高度の音聲を發し、之を出來る丈長く保續せしむるの方法によりて練習し得べし。此他尙詳細なる注意等は追て後章に説明すべければ上欄参考の部を引照して見らるべし

# 第四章

## 高等唱歌法

- (上) 本譜…………… 畧譜…………… 讀譜力…………… 聴覺練習…………… 獨唱…………… 發聲…………… 音程練習…………… 練聲…………… 氣息練習、レガート、スタッカート、スエール、pp、ff…………… 合唱…………… 音色…………… 感情の一致
- (下) 精神の鍛練…………… 公會に於ける唱歌…………… 其場所(會場)に應て唱歌すべき事…………… 態度…………… 品格…………… 必要なる資格(音聲、實枝、態度)日常の注意(食物、寐起、空氣、精神の快不快)身体の溫度に注意すべき事…………… 演奏會或は唱歌時に於ける注意(食事、身体の快不快、壯、疲勞、唱歌時の感情、室内の溫度、光景…………… 感情と發想……………

上

本章に於ては稍高尚なる唱歌法に就て述べんとす、而して

多少音樂に經驗ある諸氏が尙ほ進んで唱歌法を研究せんとするの便に供へんが爲めなり、

第一に諸氏の知らざるべからざるは本譜及畧譜の一事なり、

本譜とは本書第二章に於て説明したるが如く五線の譜表上に記載するものにして最も完全に近き記譜法なり、

本章に於て説かんとする畧譜は、彼のトニックスolfの記譜法と稱するものにして、do. re. mi. fa. s. Ia. si. (ti)の七文字を以て階名稱法、としたるものなり、從て拍子、諸記號等に多少の差異あるを以て左に之を記さん、元來此記譜法は拍子より割り出して音符の歷時を示したるもの故、本譜又は普通畧譜に依て養れたるものは、最初多少の困難を覺ゆるなるべきも、熟達するに及びては反つて見易きに至るべし、



て新曲譜を見て之を讀む事恰も讀書家が讀書するが如く  
ならざるべからず、其方法は音程の何、調の何たるを問はず、

聴覚練習

只單調子に、手を以て其拍子を探り、階名を稱呼すべし。例せば甲の如く「ハ」調に於ける新曲を見て、乙の如く、何れの高度にてもよし(或は必ずしも一定の高度にあらずともよし)只拍子を數へてdo re miと稱呼するを云ふなり。

かくて熟達するに及び漸次速かに讀譜するを得べし、是處に於て讀譜力なるもの、多少養成せられたりと云ふべし。

次に聴覺の發達を計る爲めに諸種の練習をなさざるべからず、左に數種を列

舉すべし、

第一、余は之を名づけて第一種練習と云ふ換言すれば、

和聲的若しくは調和的練習とすべし。

第二、余は之を名づけて第二種練習と云ふ換言すれば、

施律的若しくは不協和音的練習と稱すべし。

第一、適當なる語を得ざれば假に此語を以てす、其方法は樂器(オルガン又はピアノ)にて一音若しくは數音を出し置き之れに自己の音聲を和せしむるにあり、

一例を示めさんに

樂器に向つて先づ其中央なるハ音(C)を奏し、之れと同時に最初ハ音を發聲し「ア」

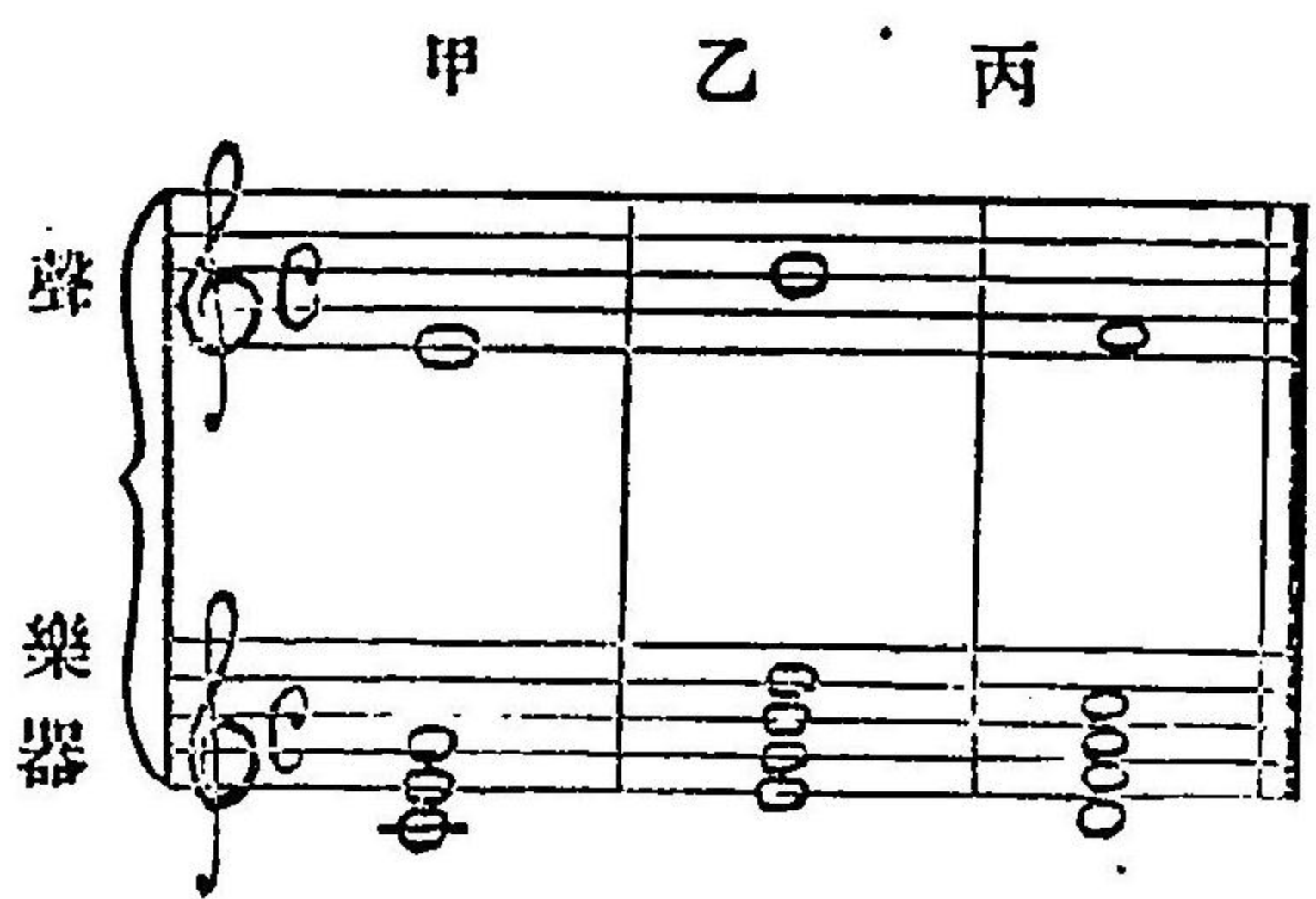
聴覚練習

にても階名にてもよし)樂器は依然としてハ音を奏し居る間に自己の聲は其五度即ちト音(G)に昇りて止るなり、次に自己の採りたる五度が果して正確なるや否やを驗する爲めに樂器を以て之を試むべし、(甲)圖の如し。

如斯或は三度、或は四度、六度、一八音等の如く、協和音程を以て練習題とす、而して此練習の目的は音程を正確ならしむるに非ずして、専ら其聽覺に訴へて、五度の協和は如斯、四度の協和は如斯感じ、三度の感じは如何なるか、等を悟らしむるにあり、二部以上の合唱を成さんとするには必ず和聲的聽覺の發達を要するが故なり、元より聲のみに於ける和聲の響きと、樂器と聲とによりて起る和聲の感じとは多少の差異あるを覺ゆべけれど、之れにより聽覺を發達せしめ置くは必要なる方法と云ふべし。

二例を示さん

之れは樂器を以て數音を奏し、其中の一音を尋ね求めて發聲するにあり、此場合に於ては樂器はなるべく和絃を奏するを可しとす、即ち樂器に於て、ハ、ホ、ト、(C、E、G)の三音を



同時に奏し、其中央なるホ(E)音を探りて之れに聲を合すにあり、上圖甲、乙、丙、等の如き問題を作りて漸次に複雑なるものに至るべし。

如斯練習は獨唱の折、其伴奏が如何に複雑なる和聲を有し居るをも、自己は獨唱の部を唱ひて決して他の音に妨げらるゝ事なからしむるに必要なるものと云ふべし、尙上達し來らば丁圖の如き練習

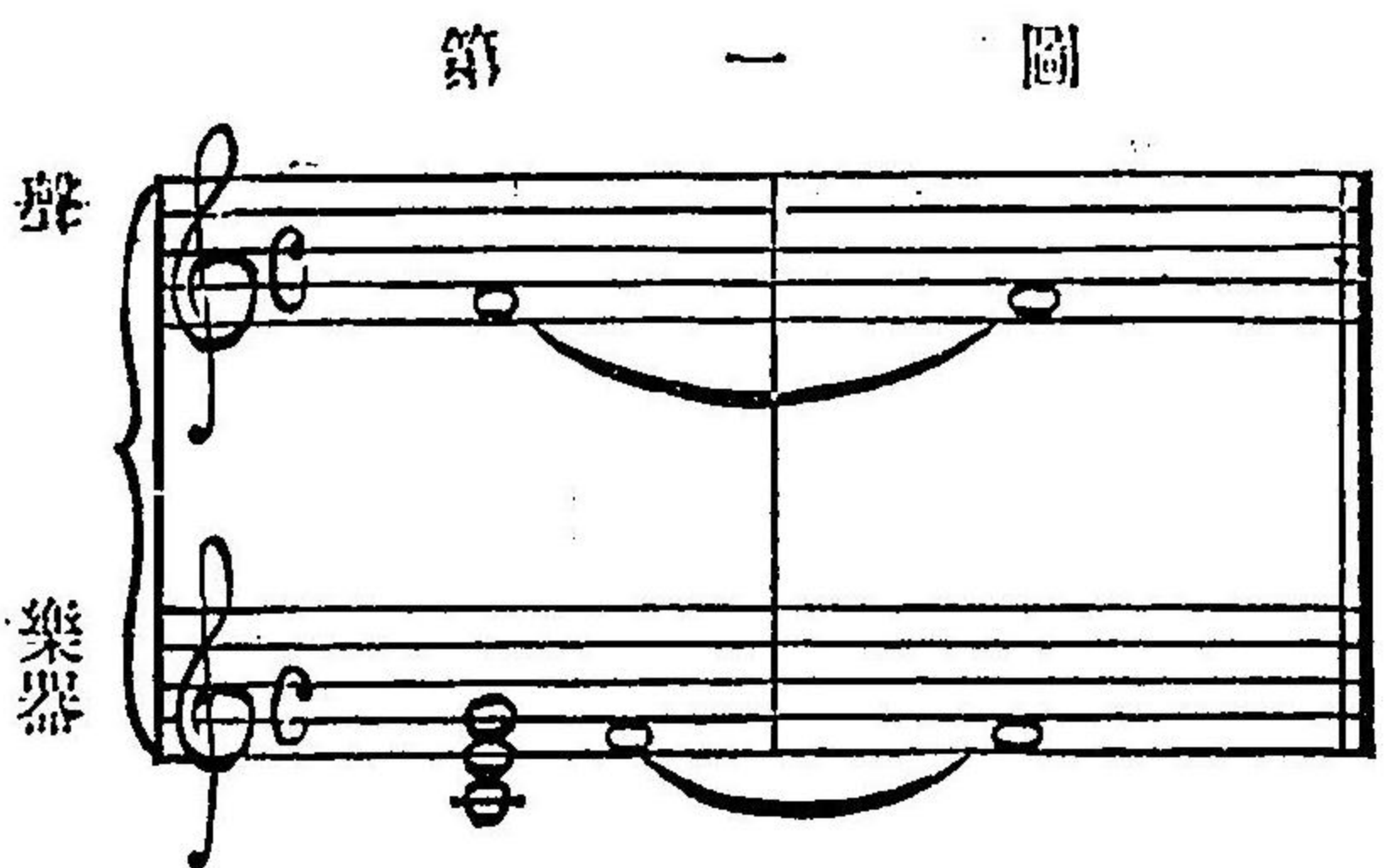
をなすも可なり此他練習問題數種は本書の下巻末に記載する事はなしぬ。



若し出来得れば二人以上の人集まりて前述の方法により聲のみを以て和聲を起し、而して其各音が正確なるや否やを検する爲にのみ樂器を以てするも亦可なり云ふべし、此場合には、二音、三音、位迄を合唱すべく夫以上は反つて益なかるべし、但し人聲のみを以て練習するは稍上達せし後にあらざれば折角の練習も無益なる事あるべし。

第二、施律的若しくは不協和音的練習とも稱すべきもの。之れは極めて不協和の數音中、一音を採り之れと同度に聲

を出して試むるにあり、例へば第一圖の如し、此練習は極めて困難なるものなれども實際上には有益なるものなり。



又第二圖の如く樂器に於ては(ピアノにてペダルを踏みて奏すれば最も可なり)順次高音又は低音に向て進行し行く間に聲は単に一音若しくは半音を上下せしむるなり、而して最も正確に前位置、及び後位置を保持し居らざるべからず、即ち第二圖の如し、又半音程を上下する練習の場合には半音階的奏法によるを可とす、細しくは巻末の練習題を見らるべし。

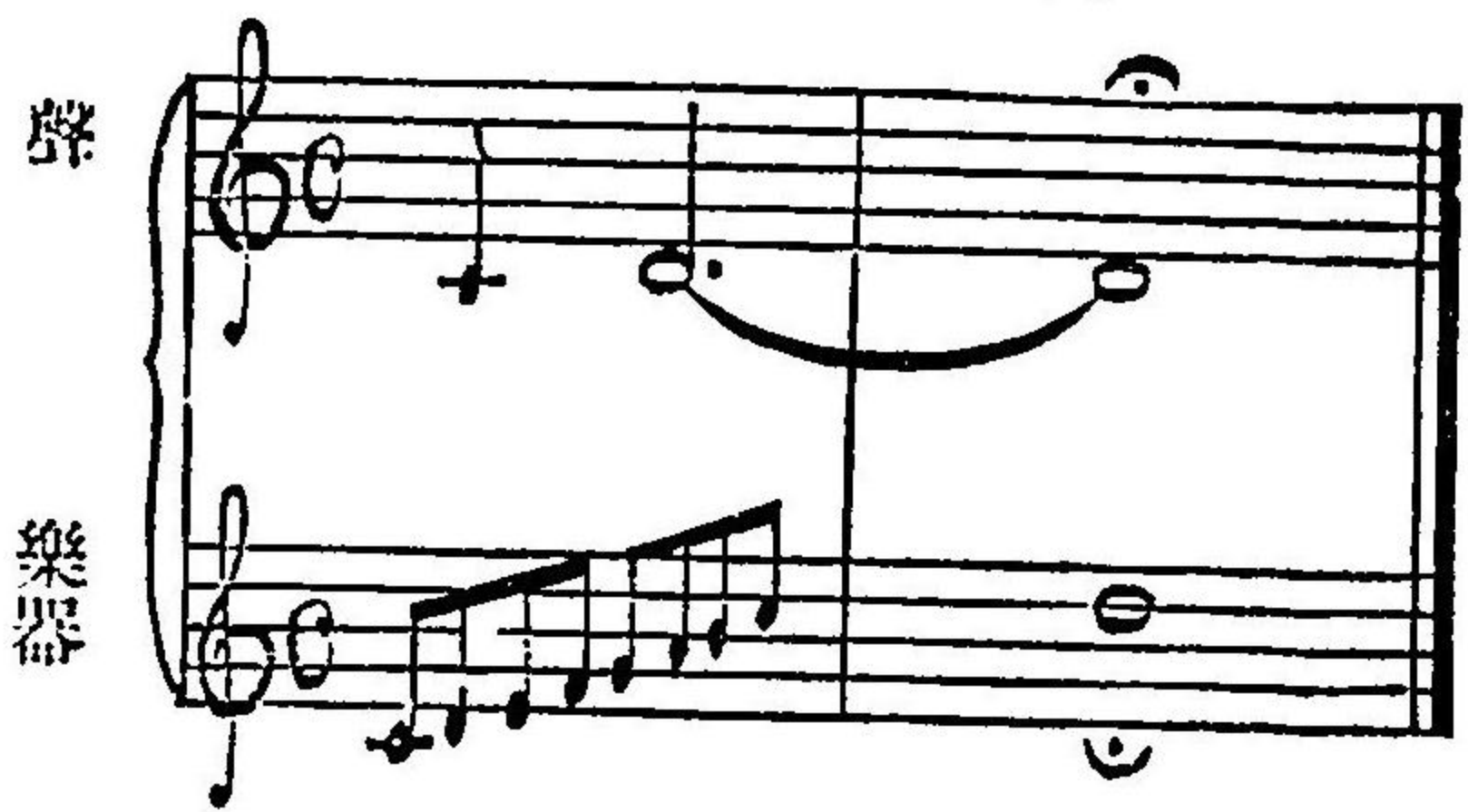
以上の如き練習は専ら獨唱の場合に於て實際音聲の正確



を保持する爲め多大なる益あるものなり。

漸次社會の進歩につれて、音樂も亦一般に高尚なるものを歓迎するの勢あり、既に此意を以て東京音樂學校助教授楠見恩三郎氏の編にかゝる中等唱歌集なる獨唱歌集の出版せらるゝあり、是處に於て余もまた本章に於て獨唱に於ける注意を述べんとす、余元より獨唱に通達したるものにあらず、只僅々三四年間に於ける經驗より少しく自己の得たる處を記すのみ。先輩識者の笑ひごならんは恥しさの至りながら之によりて初學者の益する處あらば余の幸福亦之に過ぎざるなり。

第二圖



聲 樂器

發聲

發聲とは單に音聲を出す方法を指すものにして聲音の美醜等を論ずるものにあらず、元來人聲は其直接機關たる咽喉の形狀、及び其口腔の開き方、等に依りて殆んど人聲そのものを變ぜしめたるかの如き感を起さしむる事あり。

されば第一に注意すべき事は、口腔の開き方にして若し十分出來得る丈の大きに口を開かずして發聲する時は其聲口中に籠りて外方に出でず、従つて明瞭ならざる感を起さしむべし、口の開き方は約そ二本の指を列べて之を縦に入れ得る程の大きにすべきなり、然れども余りに口を開き過ぎたるため舌根が突起し、口腔内の形狀を變ぜしむる事あり左に數ヶ條の注意を掲ぐ。

- 第一、口は可成大に開くべき事。
- 第二、舌根が突起せざる様鏡面に向て正すべき事。

第三、舌根の突起を注意したる場合には又舌端が前方に出で過ぎて齒をかくさゝる様極めて舌を平かにおくべき事。

第四、余り不自然に口を開き過ぎたる爲め、下顎の筋肉を以て喉頭を壓さざる様注意すべし、若し強く喉頭部を壓す時は音聲は堅き感に過ぎて優美を失ふ恐れあり。

第五、發聲練習の折は「ア」の發音を以てするを可とし、若し此音に少しにても曇りを生じたるの感あらばそは發聲の正しからざるを知るべし。

第六、最初は其聲の感じが丁度木炭畫の如く、又は楷書の如き感あるを可とす、決して美聲と云ふ事に意を注ぐべからず、只正確と、忠實の二字を守るべし。

第七、聲の響きが、口中にあるが如き感あるは未だ全く正しからず、其音聲が口腔外にあるの感を與ふ様勉むべし。

第八、咽喉は正しく自由に保つを可とす、人によりては余りに顎を引きつけ過ぎて咽喉をしめ付け鋭き音、聲を發して得意がるものあり、西洋音樂に於ては之等の苦痛ある感は決して賞すべきにあらず。

第九、高度の音を出す時に顎を前方に出して發聲するものあり、其人もし此姿勢を以て自由に力ある音聲を出し得るならば、そも亦強てとがむべきにあらねど、天性得たる美聲家の他には多くは此方法を以て正しき聲を得る事難きものなり、若し普通の人が此方法を以て高音を發聲せんに成程其温

和なる感情を與ふる場合には適すべけれど、最強聲を以て熱情を表はさんとする場合來らば、十分力ある音聲を出す事能はざるに至るべし、故に其發聲練習の場合に於ても最強聲を出し得るの方法をも練習せざるべからず、そは高度に至るに従ひ、喉頭突起を顎の裏面にかくす様するにあり、而して其聲音が一度口腔の上顎につきあたりそれより開放されたる口を出で、外氣を振動さするの感あるべし、然れども以上の方法は最上の良法なるにあらず普通人の練習すべき方法にして天才は之等の方法に依らずして自由に咽喉を使用し得べし。

此他尙詳細なる點は練聲の項に説明すべし。

次に發音の事に説き及ばんとす、發音とは其曲に附せられたる歌詞に對して云ふものにして、發聲と發音とは自ら差異あるを知らざるべからず、

余元より淺學不才外國語を論ずるの識なければ、是處には邦語に就て思考する處の一斑を述べんとす、音韻學者、國學者、等の論ずる處に依れば其文字によりて口の開方、舌の使用、口唇の働き等さま／＼あるが如し、されど、是處には音韻學を論ずるの餘白なく、又著者そのもの既に其専門にあらざるを以て只左の數ヶ條を擧げて讀者の參考に供すべし、

第一、喉音

ア イ ウ エ オ  
 ヤ イ ュ エ ヨ  
 カ キ ク ケ コ (ガ ギ グ ゲ ゴ)

第二、舌音

ハ ヒ ヘ ホ  
チ ツ

(フは唇音に囁す)

カ シ ス セ ソ

(チツは喉音に囁す)

タ テ ト

ナ ニ ヌ テ ノ

第三、唇音

ラ リ ル レ ロ

マ ミ ム メ モ

パ ピ プ ペ ポ

バ ビ ブ ベ ボ

フ 井 ウ エ ナ

フ

右は宮澤甚三郎氏の説に因る尙詳細は全氏著の日本語學に就て研究せらるべし、益する所多大なるべきを信ず。大体右の如くなれども、歌曲の感情により又は常に口を開かん事に力むる所より自然正確に出來ざる場合も起り來るべし故に初學者が發聲に注意したる時は發音の自由を失ひ、發音に注意すれば折々不正なる發聲をなすに至るは止むを得ざる事なるべし。さりて此二者兩立せざるものにあらず、只音韻學の示す所其ま、を用ひて果して好結果を得るものなるや否やは大に研究すべき問題なるべし。されば唱歌に於ける發音は聽者をして判然其歌意を悟らしめ得たるを以て足れりせざるべからず、若し是處に天才ありて自由に之等の發音を正確に唱歌する人あらばそは只余等の神的模範にして、天才ならざるものは容易にな

し得る所にあらざるなりと斷言せざるべからず。されど、彼のイ、エ、フ、ヒ、シ、ス、或はヒ、シ、の區別の如きは十分注意せざるべからず。之等の誤謬は假令聽者に了解せしむることも之を以て足れりとすべきにあらざるなり。余は新潟に來りて小學校に於ける教師の模範的發音に於てすら此區別の正確ならざるに驚きたる事ありき。日本語は或外國語に比しては唱歌上發音にも困難なる場合多かるべし、然れども某人曰く、邦語は彼の聲樂國なる伊太利に似たる點多きを以て唱歌の發音をして優美判然ならしむる事を得べしと。著者は未だ其何れが是なるやを判定する事能はず讀者乞ふ諸氏の博識多才を以て斯道の爲め研究の勞を執られん事を。

然れども余は以上の如く發音の困難を訴へて、徒らに練習

の方法なしと叫ぶに非ず左に少しく之を述べべし。

簡單なる音程、曲節を作り之にア、エ、イ、オ、ウ、の五文字を附して以て唱歌の發音を判明ならしむるに資す。

其他かゝる練習題を任意作るも可なり。同一問題を或は遅く、或は極めて速かに唱歌するも妙なるべし。余は普通の練習題數種を下卷末に載せて諸氏の參考に供せん。發音練習として常に人にも勸め、自からも心かけ居る一事あり、事少しく兒戯に類したれども左に其方法を舉

本章發音  
の項参照

く。  
口唇を多く使用するものとして、出来得る丈左の語を速かに云ふべし。

なかもち(長持)なまこめ(生米)なまたまこ(生卵)。

坊主が屏風に坊主かいた。

白山様の大ばぎよ、小ばぎよ(ばぎよは額の方言)

又舌の練習としては、

向ふの高塚に竹たてかけてある。

陸脚伴田脚伴、

大脚立小脚立。

うちの行燈まる行燈、隣の行燈圓行燈、向の行燈。

隣の客はよく柿を食ふ客だ。

又其他一息に多くの語を云ふものには。

山王の櫻の木にお猿が三千三百三十三萬三千三百三十三疋さがつたさ、オしさてまここにお猿が三千三百三十三萬三千三百三十三疋さがつたさ。

法性寺の入道前の關白太政大臣と云つたらば腹を立てたから今度からは法性寺の入道前の關白太政大臣様と云はふなふ法性寺の入道前の關白太政大臣様。

歌唱ひの様に歌唱へるなら歌唱ふけれど歌唱ひの様に歌唱ふ事が出来ぬから歌唱ひの様に歌うたひの前で歌唱はぬ。

等の如きは一息に出来得る丈之を繰返して多く云ふを可とす。

而して之等の語は地方々に數多あるべければ適當なる

練習題を求め得べし、如斯は殆んど無益なるが如くなれども實際面白味を感じつ、不知不識の間に利益を得る事多大なるものなり。

次に練習すべき事は音程なり。

音程は最初簡易なるものより初の漸次高尙、至難なるものに至るべし、即ち普通音程より初め半音階的音程(變体音程)に及ぶべし、其順序は卷末の表に就て見らるべし、只其音程練習の際には可成明瞭に、可成活潑に發聲するを可とす。

自己が天與の聲をして更らに發達進歩なさしめんとするには練聲法なるものあり、練聲法には種々至難複雑なる事項多かるべけれど、是處には其普通實行し易きものを擧ぐべし。

人聲は元來薄弱なる筋肉と聲帯の振動によりて起るもの

音程練習

練聲法

なれば其誰一の機關を害せざる様注意しつ、此方法を行はざるべからず。

第一、音量を養成する事。

音量養成

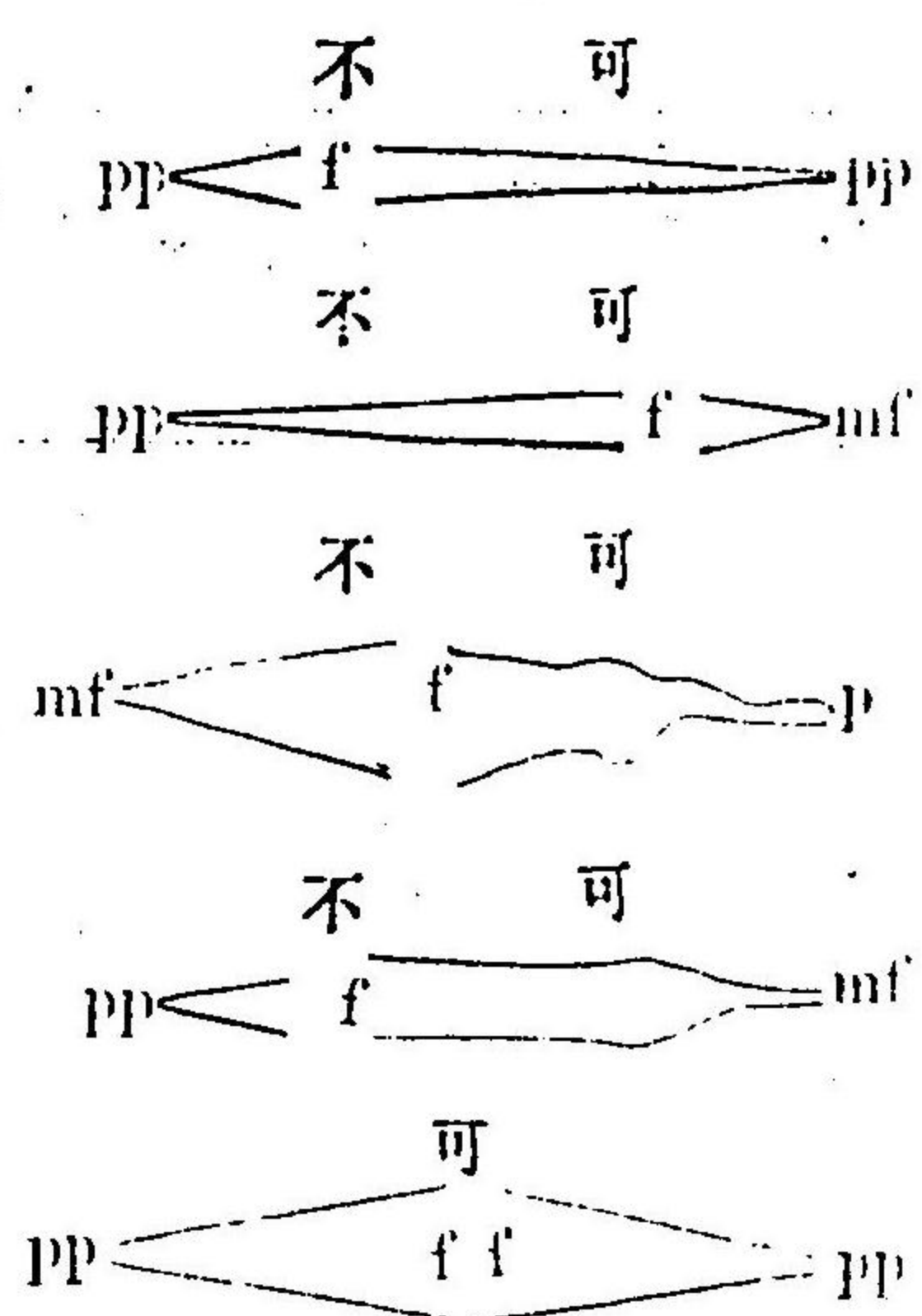
音量とは其聲の厚さ、幅さ、深さ、等を意味するものなり、厚さ、幅さ、深さ云々の文字は只形容に過ぎずして實際かゝるものあるにあらざれど、聽管を打ちて一種の感情を引き起したる時、此四種の中何れにか相當し或は何れかの欠點あるを知る事あるべし、例せば、吾人普通人の聲に比して彼の漁夫の堂々たる聲の如き多くは厚さ、と深さ、を有し、劇場に於ける俳優の聲等には多く幅さ即ち廣さあるを感ずるが如し故に音量あるものとは、容易に出し得る大聲、換言すれば苦痛の色を出さずして發し得る大聲なりと云ふも大差なかるべし、凡そ財あり家富めるものは必要に應じて其倉

庫より金銭を如何程にても出し得べしと雖も貧にして金銭の貯蓄なければ、如何程同情に富み、如何に心に願ふとも多大の金を之れに投ずる事能はざるが如く、人聲に於ても、容易に大聲を出し得るものにあらざれば凡べての熱情、壯大なる感情等を人に現はし且つ吝む所なく音聲を使用する事能はざるべし音量の必要な所以之れなり。

偕て其方法は樂器に向ひて自己の音聲中最も出し易き高度の諸音に於て(例へばB(ハ)よりB(ロ)音迄位を普通人の最も出し易き音域とするが如し)一音づつ、發聲し初めは弱聲に、漸次強く又終りを弱聲にす  $\wedge$   $\vee$  の記號の如くならしむべし、而して之れには自己の十分吸入したる空氣が口外に出で盡し終る迄發聲して其初めも終りも全じ弱きにし、且つ中央は出來得る丈の大聲となすべし。此の練習に於

第二章  
音域  
参照

ては、其増減の形狀が正確なる様注意すべし左圖に之を示さん。



但し圖中不可は不正確なる形狀を知るべし。

かくして順次低音より高音に、或は高音より低音に練習し及ぶべし、此練習をなす折には殊に發聲に注意し「ア」の發音を以てなすべし。而して中央諸音(前述の發聲し易き諸音域を指す)

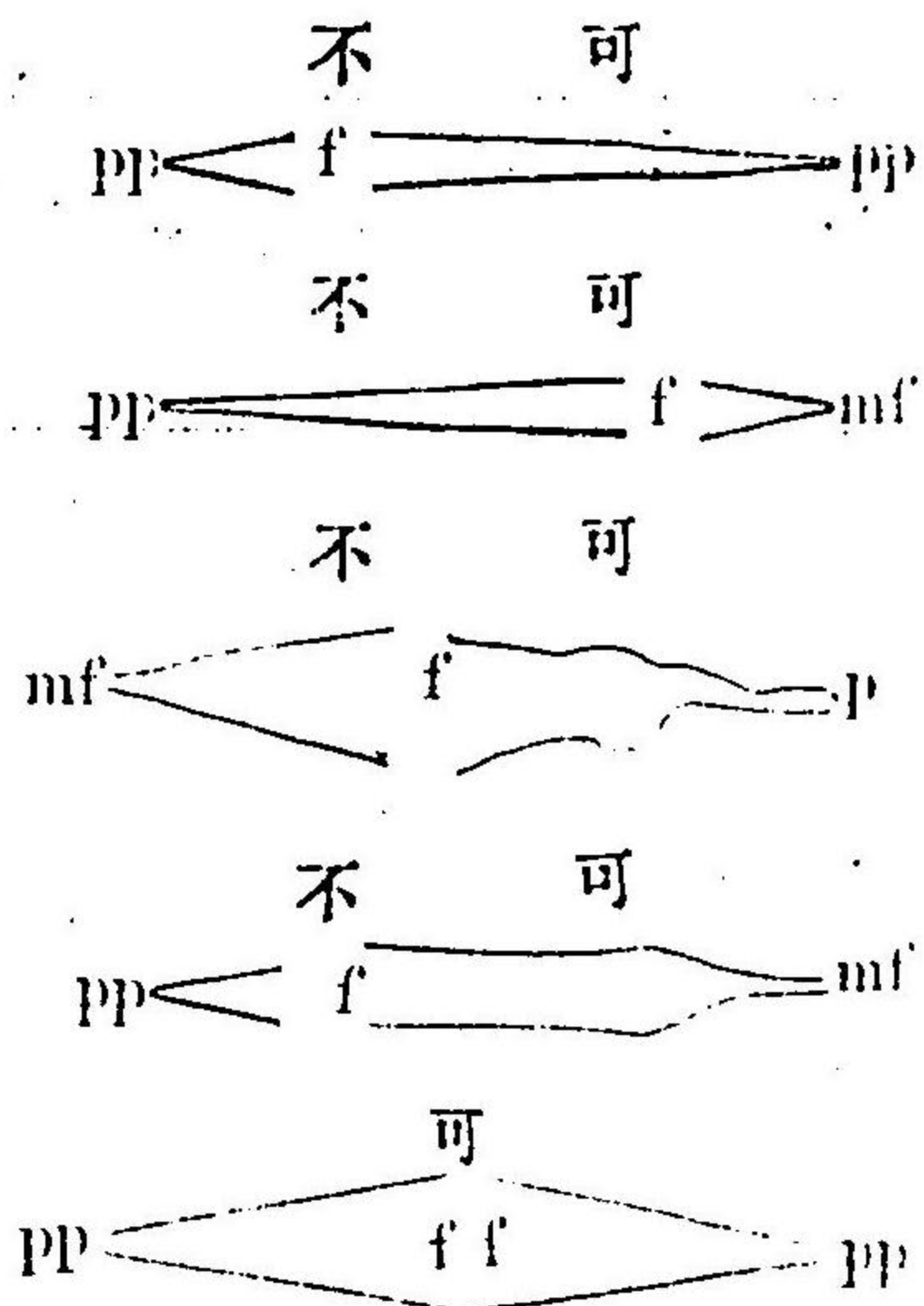
を終りしならば其音域外、上、下、の音にも及ぶべきなり。又別法あり、そは、中央(自己音域の中央を云ふ)に於て一八音を探り之を長音階若しくは短音階となし(例へば低音の者ならば低音部に於て、高音の者ならば高音部に於てする



庫より金銭を如何程にても出し得べし。雖も貧にして金銭の貯蓄なければ、如何程同情に富み、如何に心に願ふとも多大の金を之れに投ずる事能はざるが如く、人聲に於ても、容易に大聲を出し得るものにあらざれば、凡べての熱情、壯大なる感情等を人に現はし且つ吝む所なく音聲を使用する事能はざるべし。音量の必要なる所以之れなり。

偕て其方法は樂器に向ひて自己の音聲中最も出し易き高度の諸音に於て(例へばC)よりB(ロ)音迄位を普通人の最も出し易き音域とするが如し)一音づ、發聲し初めは弱聲に、漸次強く又終りを弱聲にす。^ V の記號の如くならしむべし、而して之れには自己の十分吸入したる空氣が口外に出で盡し終る迄發聲して其初めも終りも全じ弱さにし、且つ中央は出來得る丈の大聲となすべし。此の練習に於

ては、其増減の形狀が正確なる様注意すべし左圖に之を示さん。



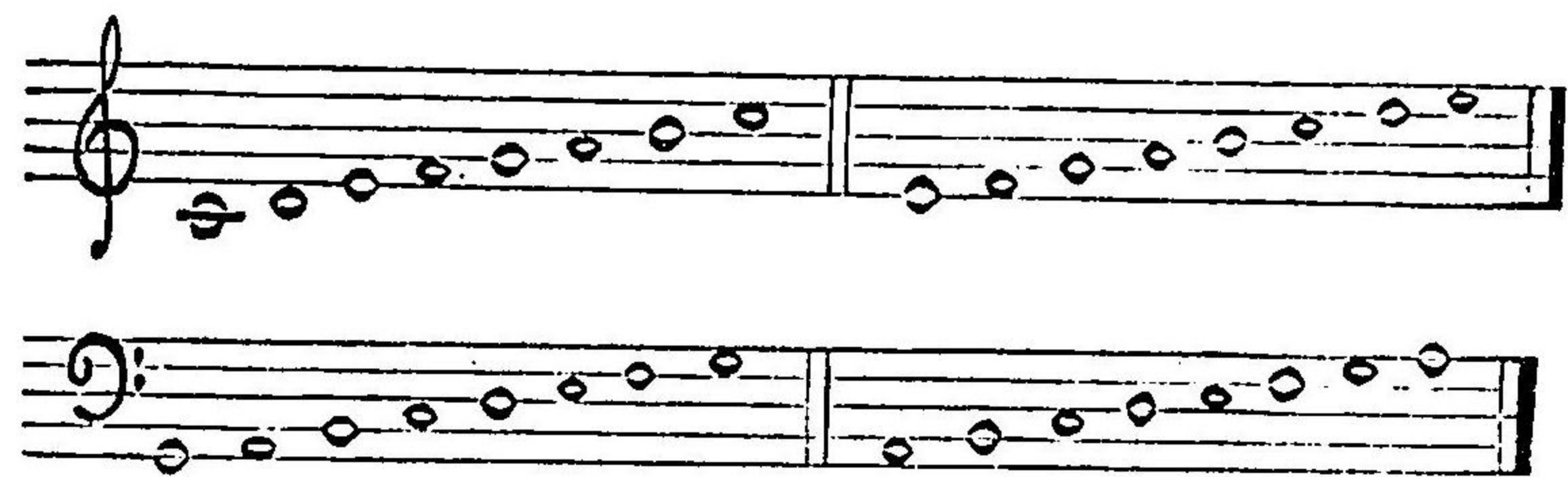
但し圖中不可は不正確なる形狀を知るべし。

かくして順次低音より高音に、或は高音より低音に練習し及ぶべし、此練習をなす折には殊に發聲に注意し「ア」の發音を以てなすべし、而して中央諸音(前述の發聲し易き諸音域を指す)

を終りしならば其音域外、上、下、の音にも及ぶべきなり。又別法あり、そは、中央(自己音域の中央を云ふ)に於て一八音を探り之を長音階若しくは短音階となし(例へば低音の者ならば低音部に於て、高音の者ならば高音部に於てする

音域

第二章  
人聲音域  
参照



が如し(上圖参照)此音階を上、下する事數回、或は最強聲を以てし、或は最弱聲を以てし、或は此音階を通じて、前述の如き形狀をなすも可なり。

かくして常に怠る事なければ遂ひには其聲の量を大ならしめ前日の苦しき大聲は容易に且つ平和に出し得る音聲となるを得べし。

第二、音域を廣からしむる事。

音域とは其人が出し得る音聲の最高最低の音限内を指すものなり、故に人によりて大小廣狹の別ありと知るべし。

一歌曲を唱はんとする時に其曲中余りに低き音あるか、或は聲を出すに難なる高音あら

ば如何に其歌を愛し其の曲を好むと雖も、之を唱ふ事能はざるべし。是處に至つて音域の廣からんを欲するに至るなり。

一得一失は人事の常りかし、音聲にも亦困難なる此事あり、即ち音量多きものは音域狭く、音域を廣からしめんとすれば音の美を失するに至るなり。故に音域は餘り急速に其志望を達せんと思ふべからず。只自己の容易に出し得る音域内に於て十分練聲するを可とす、而して數年間を期して、一音、或は二音の音域を廣からしむる様力むべし。然れども人各々天與の音域ありされば之を知らずして徒らに自己の音域を越ゆんとするは益なきのみならず反つて害あり。本書第二章の人聲音域に就て自から樂器に依り調査するか。或は専門家に就て其何れの部類に屬するかを尋ねべし。

音聲の自由

第三、音聲を自由に使用する事

音聲の使用拙なるものは、其曲意を十分表出する事能はず、其人如何に歌意を含味し、之れに感じ、居たりとも、又其曲に於ける發想を十分心得盡したりとすも若し音聲使用の自由なければ自から楽しむ事も出来がたく況んや公會の席上に於て唱歌する等の事は夢にだも得ざる所なるべし、之れ音聲の自由が極めて必要なる理由なり。

此方法も亦數種あるべけれど、今左に其最も普通なるもの三、四を擧ぐべし。

氣息練習

第一、氣息練習

之は自己の吸入せし空氣が殆んど使用され盡したる場合に再び空氣を吸入して復直ちに聲帯に觸れしめ聲として口外に出さしむるを云ふなり、此技拙

深呼吸法  
参照

なる時には歌曲は如何にも下品に且つ勢力なく感ぜべし。其方法としては、先づ肺に十分の空氣を満たすと同時に下腹部を張り、横膈膜を下方に推し下げ、而して後、口を十分開きて徐々肺中の空氣を口外に出し且つ聲帯に觸れしむべし。此際「ア」の發音を以てし其空氣の出で盡くし終る迄に幾度か口を開閉す、而して之れは聲を出すに云ふ感に非ずして只空氣が聲帯に觸る、この感じを懐く様すべし、若し其間聲帯に空氣が觸れても響を起さざる時あらば、それは咽喉の稍疲勞したるか或は音樂的聲音を出し馴れざる所より咽喉の諸筋肉が鋭敏ならざるに起因するものなり。かくして低音より高音に或は高音より低音に移遷

頤音の項  
参照

しつ、數回試むべし。  
稍熟するに及びては、頓音トウオンに發聲し、一音出すや否や直ちに幾分かの空氣を吸入し、又次ぎの瞬間に於て發聲すべし、而して肺内の空氣が常に一定の量を保持し居る様、聲帶を振動せしむる空氣を吸入する空氣を平均する事を要す。必竟するに、肺は平常の量を保持し居る間に、只聲帶の前後咽喉の内外に空氣が入する爲めのみ依りて聲帶の振動を起さしむる方法に過ぎざるなり。故に發聲練習の中に加へずして此條に説明したるなり。  
尙ほ單に氣息のみに關したるものあり、  
黙符(休止符)ならざる場所に於て氣息を嗣ぐの必要起りたる時には其前音符を幾分か短縮してこの僅

深呼吸法

少なる時間に於て空氣を吸入し直ちに次ぎの音符を唱はざるべからず、故に此僅少なる時間に於ては普通の呼吸法を用ひ居らるべきにあらざれば此場合には、下腹部を前方に出すと同時に横膈膜を下げる此動作に供なふて急に空氣を吸入し、深呼吸法に於ける腹式呼吸を行ふべし。  
余頃日ベークマン氏の強肺術を讀みて大に益する所ありき、今氏の云ふ所にして直接呼吸法に關するもの二三を摘記せん。  
(イ) 先づ身體を引き締めざる様裸体のま、か或は單衣位を着して直立し、指を胸の上に擴げ丁度小指の端が一番下の肋骨の上に来る様にし、他の指には大抵一寸位づ、置きて胸の上に擴がる様にす、拇指は腕

下に當る肋骨を押ふ。而して後頭を少しく後方にやり、両肩を上げてそろく息を吸込む、第一回には拇指を以て押へし處に全力を注ぎそれより又徐々息を吐き出すべし。吸入時間凡そ十秒、吐き出す時間凡そ五秒、第二回目には前と同様にし最もよく前四本の處に力を入れる、様に心を用ひて息を吸込むべし。息を吐き出す手順は第一回のご同じ。

(ロ) 始め両腕を水平にし胸の横へ押しつけたるまゝ、成るべく胸骨の下部を前へ出すやうなる心持ちにて息を吸ひ込み、而して又徐々吐き出すなり其時は決して腕にて胸を押しつけざる様注意すべし。

(ハ) 先づ右の手を外側へ向けたるまゝ、十分に高く擧げ、左の手を右側へ向けたるまゝ、十分に低く下ろすこ

同時に徐々息を吸ひ込むべし。此時右側の胸廓(殊に腋の下乳を離る、ここ二寸ばかりの中)に注意を集め、而して後徐かに手を下しつゝ、息を吐き出すべし。

右の方終れば、次に左の方にて同じ事を幾度も繰り返すべし。呼吸の時間は前と同じ。

尙ほベ氏の論ずる處に依れば、深呼吸而も腹式呼吸及法は非常に益あるものにして一つは消化器の爲めに、一つは肺の爲めに欠くべからざる方法なり。而して深呼吸の際は決して呼吸を止むる事なごなすべからず、空氣が肺臓内に入り來るは身体の血液をして新鮮ならしめんが爲めなり、而して体中の血液は約そ一分間に二回づ、肺臓の中を通過するものなれば其速かなる

深呼吸に  
意ける注に

血液に向て、新鮮なる空気を與へず、呼吸を止めたらんには其間に於ける血液は汚れたるまゝにて循環すべし。身体を養ふ唯一の血液が若し不潔なるまゝにて身体の諸部分に及ぶとすれば其害も亦明らかに知るを得べし。往々聲樂を學ぶものにして深呼吸及の際十分に空気を及收したるまゝ、口を閉ぢて呼吸を止め時計を以て其長さを計り、多きを誇るが如き事あり、之れ何の意味あり。某氏の著書に於ける氣息練習中にも此一事あり、注意して避けざるべからず。呼吸は如何なる場合と雖も(身体に害ある空氣中に居らざる限り)之を中止するが如き事決してあるべからず。及收時間は出来る丈長く、其呼吸を深くするは最も可なり。

深呼吸に  
注意すべし

深呼吸法は胸式(胸式)とは主として胸部の筋を働かせ、

肋骨の彈力を應用して呼吸するなり)腹式(横膈膜呼吸とも云ふ)の何れを問はず、晨起後一時間位の時か、就床前に行ふをよしとす。

場所は可成餘り風の吹かざる屋外に於て行ない、吸入する時は鼻孔よりして口よりすべからず、之れ鼻孔内には凡て微細なる塵埃等を防ぎ且つ寒冷なる空氣が直接氣管に達せざる様造られ居ればなり。呼出する時は口よりすべし。之れ自然的なればなり。

暮秋より冬にかけては地方によりて屋外の空氣が餘りに寒冷に過ぎて反つて害を受くる事もあれば注意せらるべし、今暮秋後に於ける注意二三を記さん。

(1) 草木の少なき海濱、殊に北海岸日本海に面したる地方は注意すべきなり。

- (2) 夜九時過ぎの空氣殊に暮秋より冬にかけて。
  - (3) 水上、例へば湖上、河上、海上、等の夜。
  - (4) 山谷雲に閉ざ、れたる場所。
- 其他尙ほあるべけれど、それは一般の注意中に加へて是處には畧す。

深呼吸後  
の唱歌

而して唱歌する前二三分の間に於て此法を行ふ時は平常自己の出し能ふ最高音よりも、或は半音若しくは一音の高度を唱ひ得べし。余は此方法を實驗して其益あるを認めたり。但し唱歌前に於ける深呼吸は必ずしも室外なるを要せず。衣帶を強く引きしむるは身体に害あるのみならず、唱歌時に於ては嚴禁すべき事なりと云ふも亦此理に他ならざるなり。

レガ  
ト滑

### 第二、圓滑



音の高低如何に關せず聲の使用の圓滑優美なるを云ふ、而して余りに圓滑に過ぐる時は其高度判明ならざるに至るの恐あり、彼の米國派の宣教師、或は宗教學校の女學生等が、讚美歌を唱ふ時に實に聴くも不快なる唱歌法をなすあり、之等は多く餘り圓滑ならしめんとして反つて何れが眞の音なるや、何處が其音の高度なるやを疑はしむるに至れるなり。されば此點に注意して練習すべし。

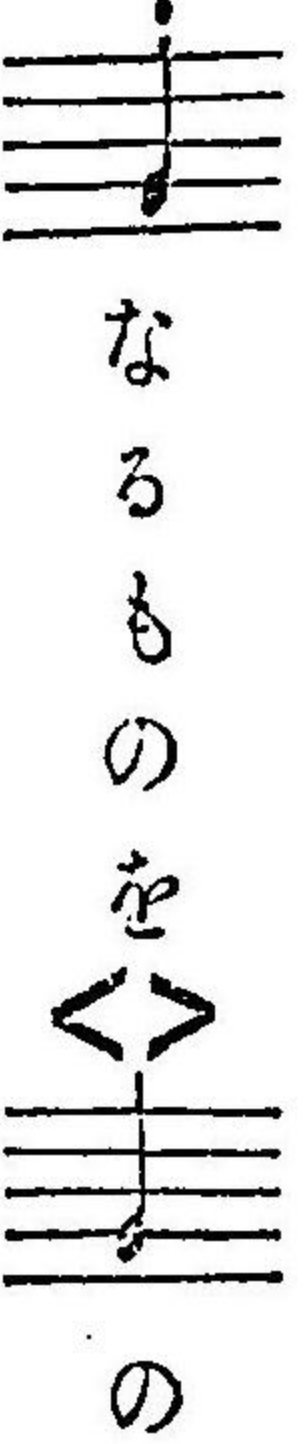
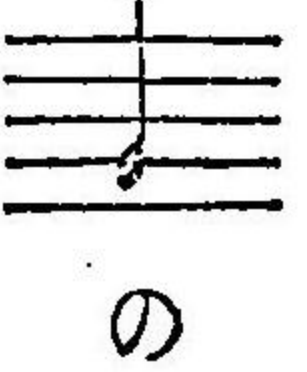
上圖の如く某音階を下方より上方に出來得る丈の圓滑を以て昇り、或は降るべし。而して其間に於て、スエルをなし、或は、最強に、或は最弱にして聲の自由ならん事を心がくべし。此練習は、一八音間を限りたる

にあらずそれ以上にてもそれ以下にても隨意之を撰ぶべし。

頓音

第三、頓音

其音の性質を全く變化せしめずして只感情を其音の半音、若しくはそれ以上に短縮するを頓音と云ふ換言すれば其音符固有の時價より短く奏唱するものなり。

此練習は最初只、正直に其音の半時價或は四分の三位の時價に唱ひ、稍熟するに及びては余音を残す事に力むべし、即ち其形状は  なるものを  の如き感情を以て唱ふべし、而して其スエルの兩端は最弱く聲を飲みしが如き心地たるべし。

尙ほ此技上達せば次ぎは其頓音なる歌詞の余韻を「ン」にして唱ふが如くすべし例ねば、「こひしきふるさつ」の「さ」「し」の二文字は頓音なりとせんに、「さん」「ん」と云ふ心持に唱ふべし。元より之れは唱歌者の感情を指したるものなれば實際に於てかゝる唱方をなさば滑稽に陥るべし。さりて餘り正直すぎたる頓音は下品に流れ、優美を欠くの恐ありと云ふべし。

スエル

第四、スエル

或一音若しくは數音に亘りて漸次強聲となし、又漸次弱聲となす此方法を稱して是處にスエルと云ふ、發聲の條にしば、説きたるを以て是處には其感情を記すべし。



ビ  
最弱音  
弱音

全音符に於けるスエルは普通只無意味に強くし、弱くすれども、若し其拍子が四拍子なる時は心の中に四拍子を數へつ、此感情を失はざる様にすべし。之れは殊に獨唱中欠くべからざる要點なりと信ず。其他の場合に於ては無意味の強弱をなからしめて十分精神に此拍子的感情あるを必要とす。

第五、最弱音、及弱音

或一音若しくは數音が最弱聲を以て唱はる、場合を云ふものにして、其最弱音と云ふ程度は聽者が聲として聽き得る弱さの最低度の音を意味するものなり。されば數百人を容れ得る室内に於ける最弱音と、普通の室内に於ける最弱音とは自然異ならざるべからず。又ピアノ若しくはオルガンの伴奏に於ける

フ  
最強音  
強音

第六、最強音及強音

る弱聲と、數多の人数よりなれる管絃伴奏に於ける弱聲とは全様差異ある事を知らざるべからず。而して此練習は前項氣息練習の處に説きたる練聲法を應用して、何れの音にても、又如何なる音階にても隨意練習するを可とす。又或一曲を悉く最弱音に唱ひ、次に少しく強き弱音を以て全様全曲に及び、最弱音と、弱音を自己の感情に訴へて研究し見るべし。

最強音とは其聲音が其人に能ふ丈の強さと熱情を以て唱歌さる、場合を云ふ。而して之も亦最弱音と全様に其場所によりて多少の差異を生ずべし。只最強音を唱ひたる時には之れが暴聲となりて聽へざる様注意すべし。或感情家の唱歌者は自己の感情の

爲め最強音を出す時に暴音となれるを知らざるものあり、之等は注意すべきものと云ふべし。而して其練習は本章音量の項に於て説きたる方法を應用して種々試むべし。

聲の疲勞したる場合には長く之を續くべからず。

聲の振動

第七、聲の振動

西洋音樂に於ける音聲は極めて自然的にして決して作らず、飾らずと云ふは誤なり。或は之が自然の聲音なりとするものあるべけれど、そは天才の自然にして吾人普通の音聲にはあらざるなり。

振動とは聲帯の振動を云ふものにあらずして聲其のもの、裝飾的に振動するを云ふなり。

少しく經驗したる唱歌者は常に此振動を用ひ、又此

の振動が其人唱歌時に於ける聲音の常となり居れり。吾國に於ては未だ此振動なるものを耳にせざるより往々之を冷笑するものあり。余曾て某女學校に於て獨唱せし折多く此裝飾を用ひて出來得る限り感情を込めたりしに、奇異なる感に打たれしと見ゆ、其評に曰く、聲は美音と云ふべきも振はざりしならば尙ほよかりしならん。亦之に類したる笑柄あり、余が壇上に立ちて獨唱せし折、丁度其前にありし一婦人がしきりに耳を傾け居りしが其聲の振ふに氣つきて思へらく、氏も未だ年若ければ場所馴ずして聲の振ふなるべしと、氣の毒さに堪へず徐かに首を上げて仰ぎ見しに平然落着きたる様なりしかば少しは安心せしが如何にもいぶかしく感じたりき

こ、而して之等の聴者は地方に於ては多少唱歌に熱心し、自からも唱歌者を以て任じ居れる人々なり、畢竟地方の唱歌教師が自から唱ひて聴かしめざる所よりか、る笑柄を起すものなるべければ、其技あるものは勉めて模範を示すべきなり。

而して其裝飾は専ら咽喉内壁の諸筋肉が微妙なる振動を起す處より音聲に之を及ぼすものにして、決してわざ／＼振動させんとして振ふものに非ず。而して此振動には甚だしく振動せしめて半音程若しくは夫以上の差に於て巧に音聲を施動せしむるものあり。

音聲をして聴者に圓滿なる感情を與へ、且つ優美ならしめんとするには是非とも此方法に依らざるべからず。又數百を容る、廣堂に於ける獨唱は此振動を用ひて人を感動せしむる事を得べし。

之れを練習せんとするものは先づ其模範を得ざれば殆んど難しと云ふも差支なかるべし。

されば是處に筆を以て其方法を説明する事能ず、只其人の音聲が諸種の方法に依りて練聲され、且つ感情を込むる事を得るに至らば自然に此方法を悟るに至るべし。十分練聲なき、る人が此眞似を爲さんとするは滑稽に陥るの恐あり。

以上は主として獨唱歌練習者に對しての説明なり。今之等の諸項に於ける一般の注意を集めて是處に再説せん。

發聲も練聲も別段六ヶ敷差異あるに非ず、練聲とは聲音の修練を指し、發聲とは練聲の一部とすることも可なるべき練習

科目なり。

されば其何れを問はず余りに熱心に其度を超過すべからず、某聲樂家は曰く、練聲は一回十五分時乃至二十分時を適度とし之より過ぐるは反つて害ありと。而して一日に普通三四回迄位を最も多き回数とすべしと。又某聲樂家は一日一回精神の最も爽快なる時を撰みて半時間位の練聲をなすを適度とす云へり。然れども余の思考する所少しく異なれり。

元より正則なる教を受けたるものに非ざれば、此等の點に於ては教師先輩諸氏に尋ねたる事もなく、只自己の欲するがまゝに練聲、研究したるを以て果して此論當を得たるや否やは自から斷言せざるなり。約そ身体の筋肉は正當なる方法に依りて運動せしむれば、

練聲に就て注意

少し位は過度なりしかと思ふ事ありとも、之を不正當なる運動に比すれば左程害なきものなり。否害なきのみならず其筋を發達せしむる點に於て明に有効なる事あり。昔聲の發達も亦之れと同じく正當なる方法に依りて練習すれば、多少過度なりしと思ふ時とても害なきものなる事を察知すべし。余は隨分に乱暴に、無法に練聲し、其後は聲音の疲勞は更らなり、身体盡く勞して人と談話する事さへ苦しき程までにつこめしが、幸にして其害を受けず幾分づゝか進歩したるを覺わたり。故に余が毎日四時間余の練聲に比して普通の咽喉と体力を備へたるものは、二時間乃至一時間半位を二回程に分ちて練習するも差支なき事を信ずるなり。余はかく多くの時間を練習に費して身体の疲勞を感じしかども、其練習後に於ては實に他人の思ひ及ばざる位迄に

練聲に就て注意

注意して決して咽喉の疲労したるまゝにて之を捨て置きし事はなかりき。故に其實験によりて練習後の注意を十分加へて練習に長時間を費されん事を希望す。然れども若し音聲の疲労して咽喉に苦痛を感じるに至らば直ちに中止せざるべからず。左に二三の注意を擧ぐべし。

本章下口  
常の注意  
参照

- (イ) 精神、身体、何れにしても疲労したる時は勞して益なきのみならず、害あり。
- (ロ) 食後少くとも三十分以上を經過させれば、練聲、又は唱歌すべからず。
- (ハ) 食事を爲したるは口中及び咽喉を含嗽して食物の口壁に附着したるものを洗ひ去るべし。之食後久しからずして唱歌せんとする場合口壁にある僅かな

- (ニ) 余り狭き室内に於て練聲するは益少し。可成廣くして天井のhighき場所を撰ぶべし。
- (ホ) 練聲する場所に直接寒冷なる寒氣の入り來らざる様すべし、故に窓に向はずして壁に對する方まさされり。
- (ヘ) 足の冷ゆるは聲に害あり、練聲中は可成注意すべし。之れを全じく上氣するも不可なり。
- (ト) 練聲後音聲疲労したる時は先づ殊に冷氣を避け、雞卵一二個を食するか、少しく砂糖を入れたる湯を飲むか、或は微温湯を以て咽喉深く含嗽するを可とす。可成談話を避け身体の疲労を回復せしむる様つこむべし、單に咽喉のみを使用したるが如き感ありと

合唱

雖もそは大なる誤りなればなり。  
 其他は項を改めて記すべければ是處には畧す。次ぎに獨唱  
 と少しく趣きを異にしたるものあり、即ち合唱之なり。  
 合唱に二部、三部、四部、等の別あり、尙ほ以上とてもなきにあ  
 らねど普通は右の四種とす、而して男聲のみのもの、女聲  
 のみのもの、男女合唱するものとの別あり、従つて其注意  
 と感情に多少の差異あり。  
 二部合唱、

男女、の何れなるを問はず、共に高音と低音と感情の一致  
 せざる時は其曲死す。感情の一致のみならず尙ほ要求す  
 れば音色の調和をも注意せざるのみならず。多くの唱歌  
 者はこの點に於て注意する事少し故に音程も正確に、感  
 情も畧一致し居るにも係らず、何となく物足らぬ感を聽

感情の一致

者に與ふるは之れ音色の調和を欠きたるが爲めなり。例  
 へば低音が、幅廣く少しく鋭き聲音を以て唱ふにも係ら  
 ず、高音は圓く幅狭き聲を以て之に合唱したらんには恰  
 もフリュート(笛の一種)を以て高音を奏し、ピアノを以て  
 之に和したるが如き感あるべし。ヴァイオリンの二部合  
 奏若しくは同種樂器の二部合奏の、聽者をして圓滿なる  
 感情を懷かしむるに比しては何となく物足らぬ感を起  
 さしむべし。低音の量多く音色の質朴にして高音の優美、  
 高雅なるはまだしも聽き易すかるべきも、之に反して高  
 音の量多く幅廣きに引かへ低音は圓くして幅狭からん  
 には恰もコルチット(ラツパの一種)にして高音部を奏  
 するものなり)を以て高音を奏し、ヴァイオリンを以て低  
 音となしたるが如く、或は体少、頭大の不具者の如き感あ

るべし。

以上の如き理あるを以て出来得る丈、互に音色の調和を計るべし。さりごとて俳優が種々の音色を真似するが如き、下品なる真似方に非ず、其發聲の如何等により幾分か兩者相似れば足れりと言ふべし。是處に音色最も相似たる兄弟ありて、其技も亦等しき兩人が精神を合せて二部を唱ひたらんには、殆んど欠點なき唱歌を聽く事を得べし、西洋人の多くが夫妻の二部合唱をなすものあるは、亦此理に依れるを知るべし。

男聲三部合唱、若しくは女聲三部合唱に於けるも亦全く、音色、音量、感情等凡て一致調和せざれば十分成功したりと云ふべからず。

### 三部及び四部合唱、

女聲が高音二聲を唱ひ男聲が低音を唱ふもの之を三部合唱と云ふ、而してかく男女の聲音合唱する時は低音は上部二聲を包むが如き感情なかるべからず、低音に包まれたる中に筋骨の如き正確に判然したる聲が自由に旋行し行くは極めて心地よきものなり、四部合唱に於ける最高音は中間中音(以上女聲)次中音(男聲)を隔て、重々しき低音なる男聲と相對し四聲の調和を計りつゝ、進行し行くべきものなり、尤も旋律の各部に移遷し行くもの(數百人を以て組成する大合唱の如き)あり、之等に於ける四聲の勢力は、常に其旋律を主として、之を助け、之に調和し行く様にすべきなり、之等の合唱は現今日本に於て獨り音樂學校の合唱あるのみなり、余は是處に音樂學校生徒諸氏に一言す、諸氏は實に幸福なるものなり、日本に於け

る唯一、否東洋に於ける唯一とも稱すべき學校に在りて日に美音、美聲を以て自から樂しみ、共に喜びつ、其技を磨かん事に熱心せらる、美聲の至りに堪へざる也、然ども只其技を磨くのみを以て足れりせず、進んで以上の諸點に迄思考せられん事を希望す、余は在學中は全じく諸氏の組成せらる、合唱中の一人となりて數ならぬ身の責を盡したりき、其當時常に心に泣き密に慨嘆せしは、合唱に於ける感情の一致少なきことなりき、各自其技に誇りて他の聲と和するてふ感念に乏しくはあらざりしか、下級生は上級生の意に壓され、互に感情相隔たりて、共に助け共にはげむの心薄くはあらざりしか、なにごなく朦々たる雲霧が、其間にありて、合唱の進歩を妨げはせざりしか、嗚呼余も亦此の中にありしを以て敢て諸氏を難す

るにあらずと雖自から恥ぢて一言する事然り、然れども今は之無からん、また無き事を信ずる也、





### 第四章 下

精神の訓練

以上數ヶ條に於て述べたる所は、單に其技實に關したる事のみ止まりて未だ精神の事に説及ばざりき、大家の繪畫が人をして實物に接するの感を起さしめ、名士の彫刻が眞にせまりて見ゆるは何の爲う、之れ其技に精神の満ちたるが故なり、音樂に於けるも亦如斯精神の満たるを否こによりて非常なる差を來すものなり殊に聲樂に於て然りならず、故に精神の訓練は唱歌者の欠くべからざるものなりと信ず、余は曾てケール博士のピアノを聴き、其精神の満々たる恰も神の如く氣高き有様に感じ思はず泣きし事ありき、音樂者は哲學を學ばざるべからずと云ふも此理に他ならざるべし、即ち精神の確固たる、思想の高尙なる、趣味の高

雅なる一つとして其技を助けざるなし、而して余が是處に精神の訓練と特に題したる所以は、現今音樂を學ぶものの、其本を忘れ、其末を望みて、しきりに其技の上達せん事を願ふ、而して其技を熟達せしめんとするに必要なる、精神上の食物に就ては、殆んど之を云ふものなければなり、人あり赤兒に向ひて歩む事を教ふるに熱心之に力むるに雖、敢て其食物を與へんごもせず、身体を養はんごもせざるものあらば、誰か之を愚ごし狂ごして笑はざるものあらんや、現今音樂學校に於ける精神修養の方法は知らずと雖、普通唱歌を研究するもの、少しも是處に思及ばざるは大なる誤なりと云ふべし。

人各欠點あり、長所あり、癖あり、美德あり、其性質によりて異なれども、長所をのばし、短所を矯め、欠點を補はざるべから

ず、而して出来得る丈け、圓滿に近き人物とならざるべからざるなり。

音楽は其人自身の性質を表はす唯一の技術なり、故に其人種々の癖あらんか直ちに其技に現はるべし、破潰されたる鐘は決して美音を出すものにあらず、其道徳心なく思想の高尙ならざる人が、如何にして美音を出し得べき、之れ余が深く信ずる道理にして人毎に告白する所なり、暫らく理想論を中止して少しく實際に於ける心得を記すべし、公會に於ける唱歌は元より、其技の熟練を要す、雖、其人にして精神訓練に意を注がざれば、時に大なる失敗を招く事あり、俗に場馴れたり云ふは、即此精神訓練の幾分を得たるものと云ふべく、其体が檀上に備はりて見ゆると云ふも、亦此幾分を修して得たるものなるべし、余が此處に題したる文

公會に於ける唱歌

字の餘りに意味あり氣に聞ゆれども、必竟之等を指したるのみ實際に於て場所馴ると云ふ事は出来易きが如くにして難きものなり。

されば平常心かくべき事は數多の人の前に出で、恐れを懷かざる様すべき事なり、其檀上に登りて唱はんとする際に一應全會集に眼を注ぎて態度を定むべし、決して時を惜み速かに唱ひ出さんとすべからず、精神を十分落つけて後ち徐ろに口を開くべし、又室内の音響如何によりて聲を用ゆれば失敗少なし、初心の者は會集の入らざる時に練習したる其まゝ、を以て唱ふが故に、時として聲の粗を現はす事あり、反響多き室に於て練習する時は、自然、自分の聲を美聲と感ずべしと雖、さて其室内に多數の聴衆を容れたらんに、反響は忽ち消れて非常に自分の聲の耳立ちて聽ゆるに

場所  
に  
照  
法  
じ  
たる  
唱

至るべし、かゝる場合に於ては可成柔かに、出来得る丈温和に、而も平常より幾分か強く唱ふべし、多数の人を以て成る合唱は反て聲を弱めたる方好結果を得る事あり。

又場所によりて其唱法を變じたる方聽者に快感を與ふる事あり、例へば十疊敷の室に於て唱歌する時、數百を容る、廣會場に於て唱歌する折は、單に聲のみにあらず、其態度感情等も亦相違あらざるべからず、普通の室内に於ける唱歌は其室内に滿渡る強聲を以て、最強聲となし最弱聲も亦從て弱くせざるべからず、而して若し其室に反響少しもなければ口腔に於て響鳴を起して、巧に聲を旋轉せしむれば、必ず聽者に快感を與ふべし、又狭き室内に於て唱歌する時は氣息が非常に聽者の耳障りとなる事あり、之等も注意すべし。

何れにせよ其場所に應じて唱法を變ずる事に注意すべきなり、尤も之等は少しく自己の技術發達せざれば注意の仕様もなかるべけれど、兎も角も心得べき事なり、我國に於ては未だ必しも音樂會等の會合が、西洋館の如き概して反響よき室内にのみ開かる、ものにあらず、天井低く障子の開けはなされたる疊敷の場所に演奏會の催さる事などもなきにあらず、又天井は無きが如き劇場に開會する事もあるべし、余は現に地方數ヶ所に於て此經驗をなして幾分か悟りたる事あり、いつもいつも同じ唱歌法によりて悉く聽者に感動を與へ得るや否やはよく研究すべき問題なり、又場所に應じて撰曲する事も必要なるべし、余は或音樂會に於て場所に就て不満を申出で若しも某會場ならば獨唱すまじご決心したる事もありし程なり、されば單に獨唱者又は

合唱者の心得べき事のみならず、其會場に於ける整理者も此等の點に注意して、余り風の吹通らざる様に窓を閉づることか、演奏者の唱ひ易からしむる様注意すべき事なり。次に必要なるものは演奏者の態度なり、實技如何に妙なりとも其態度之に應ぜざれば決して聽者に満足を與ふるものにあらず恰も盛れる器物の如何によりて料理の風味を害し、或は之によりて反つて悪感を起す事さへあるが如し、演奏者は其凡べてが聽者に不快を與へざる様注意すべき事なり、喜氣満々たる歌曲を唱ふに何ごなく浮立たざる態度顔面を以てせば歌意を現はす事能はざるのみならず反つて不快の念を起さしむべし、さりこて悲哀なる歌を唱ふに満面笑を含みたらんには何の意味なきものとなり終るべし。

演奏者の態度

只感情のみあらばかゝる事を論ずるに及ばずと云ふものあれど若し之を現はすの方法に注意せざれば其感情は他人に通ぜざるべし、人、言語を知らざれば如何感情に満たりとも之を十分表す事能はざるが如し、然れども余は是處に演説に於けるが如き身体の動作を指すものにあらざるなり。

又余りに動作をなす時は反つて下品に感ずる事あるべしされば品格を有する様注意せざるべからず。一体唱歌者として必要な品格は實技の優れたるは言をまたざれど、檀上に立ちたる折の風彩容貌等に至るまで聽者に快感を與ふる事をも含有すべきなり。紙上に於ける理論は暫く措きて以下日常注意すべき數ヶ條を揚ぐべし。

注意

第一、食事に就て。

第一、食物

- 一、鹽分強きものは一切食ふべからず。
- 一、醬油を用ふる時は一度煮沸したる後にすべし、酢の如きも多量は宜しからず。
- 一、餅菓子の如き糖分過ぐるものは多く用ひざるを可とす。
- 一、味噌汁は時に害をなす事あり注意すべし。
- 一、冷たるものよりは暖かきものを食すべし。
- 一、食物は可成消化し易きものを用ふべし。
- 一、汁類は余り多く用ふべからず。
- 一、飯は柔かきを可とす。
- 一、余り大食すべからず。
- 一、肉類を多く用ふべし。

- 一、野菜は可成十分煮たる後ち食すべし。
- 一、食事は單調なるもの宜しからず。
- 一、食後は必ず微温湯を以て口中より咽喉をよく嗽きおくべし。
- 一、茶は余り宜しからず。
- 一、牛乳は沸騰さしたる後一口づ、數分時に飲むべし。
- 一、余りに油強きものは食すべからず。
- 一、菓物ある季節には適當に之を食すべし殊に食後に最も可とす。
- 一、餅を雜糞として用ふるは一時音聲を助くる事あり(但し宜く煮ざるべからず)
- 一、可成愉快に感謝して食すべし。

感情の  
致

- 一、若し止を得ずして酒を飲みたらば其後決して大聲を發すべからず、之は往々ある事にして又非常に害あるものなり。
- 一、薬用として清心丹の類を用ふるも可なり(食事後若しくは精神不快の折などは大に可し)
- 一、復方次亞憐散舍利別、(之れは諸薬店にあり、一瓶七十錢内外のもの)を茶碗に湯を入れ、五六滴を混じて服用すべし。
- 一、日常に健胃劑の類を服用するも可なり。
- 又此他に
- 一、センセン(一時流行したりしもの)
- 一、リストリン。
- 等の如きものは多くして一々枚舉に追あらずと雖之等

第二、睡眠

- の流行物は概して効少きもの、如し。
- 第二、眠りの事に就て、
- 一、身体を安する爲めには、十分眠りの時間をとらざるべからず。
- 一、夜長く仕事を執り居るは非常にあし。
- 一、十分眠る事能はざりし後には大聲を發すべからず。
- 一、就床前に飲食するは害あり。
- 一、睡眠中其室内に冷かなる外氣の入來らざる様すべし。
- 一、口を開きたるま、眠る癖ある人は口を閉づる様注意すべし、若し如何にしても直らざる時は薄き布を以て口を覆ふべし。

- 一、狭き一室内に燈火を點じたるま、若しくは炭火を起したるま、睡眠せば翌日必ず聲に障りあり
  - 一、炬燵を用ひて眠るは不可なり。
  - 一、十分眠らんとして日光暖かき室内に翌日の十一時過ぎまでも無理に床にあるは反つて害をなすべし。
  - 一、若し咽喉を害したらば水を用ひて濕布繻帶をなし就床すべし時に非常に効ある事あり。
  - 一、夏の朝の如きは可成早起するを可とす。
  - 一、朝起きの後直ちに發聲するは悪し、口中を洗ひて後然すべきなり。
- 又余り咽喉の疲勞を覺れたる場合には、ビール少量を飲用して就眠するも時に大に効あり。

第三、空氣、氣候に關して、

- 一、塵埃は十分避けざるべからず。
- 一、外出の際余りに寒風烈しき時は必ず何物かを以て鼻及口を覆ふべし。
- 一、夜、野外に於て唱歌するは害あり、殊に秋より初春にかけては、非常に注意せざるべからず。  
暮秋月明らかなる夜、池畔に於て高吟するものあるは屢々知る所なれども之等は非常に害ありと云ふべし。
- 一、東北地方に於ける暮秋より冬へかけての夜の空氣は咽喉に非常なる害を與ふ。
- 一、又或地方に於ては只一陣の風が咽喉に大害を及ぼす事あり、余は曾て某山間の地に於て之を経験

第四、精神の快、不快に就て

- したり。
- 一、又寒國に於て、少しく冷かにして中に甘味を含み且つ咽喉に直接感ずるが如き空気を呼吸する事あり、之も亦時に害を與ふる事あり、注意すべし。
  - 一、暮秋より冬にかけては夜八時頃より過ぎの空気が室内に入り來るを防がんが爲めに早く戸を閉づるを可し。
  - 一、山谷の冷風、河上の水氣、海濱の潮風等は時として咽喉に害あり故に、海濱、山谷に於て練習する時は注意を要す。
- 第四、精神の快、不快に就て、
- 一、精神を過度に使用したる場合には唱歌すべからず、咽喉を害するの恐あり。

第五、身体一般

- 一、精神の爽快なる時俗に云ふ氣の向きたる場合に唱歌するは其發聲を良からしむるのみならず、少し位過度なりしと思ふ時にても左程の害を受けざるなり。
  - 一、唱歌時に於て少しにても不快を感じる事あらば、必ず失敗を招くべし。
  - 一、神經過敏性となりたる場合には唱歌を練習しても其効少なきのみならず非常に身体を疲勞せしむべし。
  - 一、されば此精神の爽快を得んが爲めに清心丹若しくは之れに類する薬を服用するも可なり。
- 第五、身体一般に就て、
- 一、暑、寒、とも水浴若しくは冷水摩擦を常に怠らず實



行せば、間接に聲音をも助くべし。

一、身体の冷ゆるか又は温熱余りに甚しきは大に音聲を害するものなれば注意すべし。

一、心臓の鼓動烈しき折は唱歌すべからず。

一、身体の何れかに少しにても不快を感じる所あらば必ず失敗を招く、注意すべし。

一、血液の循環をよからしめん事につとむべし。

一、元より身体に異状ある場合、疲勞を感じたる折等には多く唱歌すべからず、殊に女子にありては注意すべき事なり。

一、咽喉に痰のかゝりたるを切らんとして無暗に咳をなすは非常に害あり此場合には、うがひすべし。

一、朝起きて洗面する際に、鼻より水を通して口に出

し、毎朝怠らず試むる時は唱歌をして唱ひよからしむべし。

一、入浴して体を暖めたる場合には回くして高度の音を出し易し。

一、暑夏水浴したる後にも亦聲を出し易し。

此他尙詳細なる事を記さば殆んど限りなかるべし。されど多く他人の前に於て唱歌する人の爲め以下演奏會或は唱歌する場合に際して殊に注意すべきことの三四を示さん。

一、十分注意せんとするには普通二週間程前より凡ての點に於て養生せざるべからず。

一、此場合に於ては第一食事、第二睡眠、第三精神の疲勞等を注意すべし。

演奏會に於ける注意

唱歌時  
に於ける  
注意

- 一、要するに精神、身体、胃、咽喉共に健全なるべき事なり。
  - 一、淡泊にして少量に、且つ養分に富める食物を可とす。
  - 一、睡眠を十分ならしむる事。
  - 一、他所に於て唱歌せんとする時は豫め伴奏樂器の高度を調べおくべし、樂器に依りては其音の高度に約半音位の差異ある事あれば平常自己の練習樂器よりも高き時は思はざる失敗を招くべし。
- 唱歌せんとする當日或は二三時間前に於ては余り諸種の飲食物をなさざるを可とす。十分成巧せしめんとして日常馴れざるものを飲食し反つて失敗する事少しとせ

會場に臨  
みたる折

登壇した  
る折

- 一、此場合に於てよからざるものは、生牛乳、余りに甘き砂糖湯、余りに多くの雞卵、糞物の氷りたるが如きもの、其他芋の類、等は多く失敗を招かしむ。
  - 一、センク、或は清心丹の類も決して過度に用ふべからず。
  - 一、夏季最熱の際の如きも可成流行飲用物を避け只軟水を以て渴を止めよ。
- 會場に臨みたる折。
- 一、決して身体を齷齪働かすべからず。
  - 一、精神を勞すべからず、十分成巧せしめんとの心配の爲めに氣をあせるべからず。
- 又登壇したる折
- 一、先づ會場を一瞥せよ、之は其會場をして吾物の如

く感ぜしむる一方法なり。

- 一、決して名譽心を懐くべからず。
- 一、決して傲慢心を有すべからず。
- 一、決して恐るべからず。
- 一、登壇する前に雞卵の黄味のみを飲み、軟水をコップに一杯位飲むべし。
- 一、壇上にあつては十分に身体を豊かならしむべし、決して固く作りつけたる人形の如くならざる様すべし。

唱歌時に  
注意すべし

又唱歌時の心得。

- 一、譜を持つ手は体に添ふて自由ならしむべし。
- 一、余りに譜を見詰めたるまゝ、なるは不可なり。
- 一、態度は十分大様なるべし。

一、唱ひ居る間は決して他に心を轉ずべからず、少しく場馴る、に至りてはよく此事あるものなり。

以上の諸點は、平常より練習し置かざれば其場に於て十分効果を得がたし。

又唱歌時に於ける感情は其歌意を思ひて之が自から溢れ出たる感情となり居らざるべからず。之は唱歌者の最も注意すべき點にして、往々其技に誇るもの、失敗を招く所なり。

又其會場を覆ふ程の大なる精神もなかるべからず。

唱歌者の感情は室内の温度、室内の光景等によりて左右せらる、ものなれば之も亦注意すべき事なるべし。整頓したる會場に於ては殆んど之等の心配なけれど、地方に於ける演奏會等には往々之あるものなれば唱歌者は豫

め之等の事に注意し置くべし。

以上日常の注意以下に例擧したる數ヶ條の注意は元より人に依りて各々異なるものなれば、一樣に論じ難し。或人は甲を以て音聲に害ありとなし。或人は乙を以て害ありと認むるが如き、或は甲者は身体壯健なるが故に數ヶ條の注意を怠たりても左程の害を受けざるも、乙者は身体虛弱なるが故に只一の注意を守らざりし爲めに非常に害を受くる事あるが如きは世間其例少なしとせざるなり。

## 實驗談

余は此注意の最後に左の數例を附記せん。而して之は余自からの實驗せざるものもあれど余の知人等が語る處なれば余も亦之を信ずるのみ。

一女學生あり某會に於て獨唱をなささんが爲め非常に練習をなせしが不幸にして其前日にあたりて全く音聲を出す能

はざるに至りしかば、大に失望して既に獨唱を斷らんごせしに、其校の小使曰く、明日は必ず音聲を出し得る様にして進ずべければ決して失望なさるなご、其言葉に某氏も半信半疑にて従ひぬ、さて翌日に至りて小使は一碗の液体を某氏にす、め、之れを二時間程前に服用し給へ、決して害あるものにてもなく又忌はしき物にてもなく。ご某氏は其が言に従ひて之を用ひしに、昨日の聲、否先刻迄も言葉さへ聞き取りにくき程に勞れはてたる音聲が忽ち平常に復して何の障りもなく獨唱し終りしご。某氏は後に其藥の方法を小使に尋ねしに、小使は笑を含みつ、答ふる様、あれは蛞蝓カタツムリを取りて鹽にて溶かし多量の液となし、夫れに少しく砂糖を加へたるものなり、先きに其方法を説明せざりしは御身に悪感を起させん事を恐れてなりご。語れりご。

之れは少しく異なれども全じく音聲を用ふる演説家の談なり。其人曾ては音聲弱くして、長時間を語りつゝくる事出来ざるものなりしが漸く練習の効を積むに至り、大聲を以て二時間余も語り續くる事を得しと云ふ其人は常に演説前三十分位の時に笙茄の絞汁に砂糖を混じたるものを大茶碗に一杯程飲む事と定め居りし由。生理的作用によつて一時音聲を助くる事もありぬべし。

某西洋婦人は唱歌する數分前前に極めて乳多きコーヒ一杯づゝを用ひ居りしと。其人の語るらく、貧血性の人が興奮劑を用ふれば非常に歌ひ易からしむべしと。  
又或獨逸人は唱歌前前にビールを用ひ居れり。之も前同様の理に基けるなるべし。

某外人は音樂會前日には一切の食を斷ち其當日は淡白な

る食品少量を用ひ居れり。

如斯人に依りて其注意養生の方法等を異にするが故に、各人之れを研究して自身には其何れが適當なるやを調べざるべからず。

感情と發相

此他尙多くの注意もあるべけれど、そは下卷に於て諸氏と共に攻究すべし。余は是處に感情と發相とに就て一言し終つて上卷を閉づる事とせん。

感情とは唱歌時に於ける其人の心狀を指し、發相とは唱歌に必要な技術なり。而して今此の兩者が如何なる關係を有し居るかと云ふに、極めて密接なるものにして毫も輕んずべからざるものなり。いかに感情を有し、其歌意を解し、之に十分の發相を附せんとするも、其方法を知らざれば到底能はざるは論を待たざれども、之れに反して其技優れ、巧み

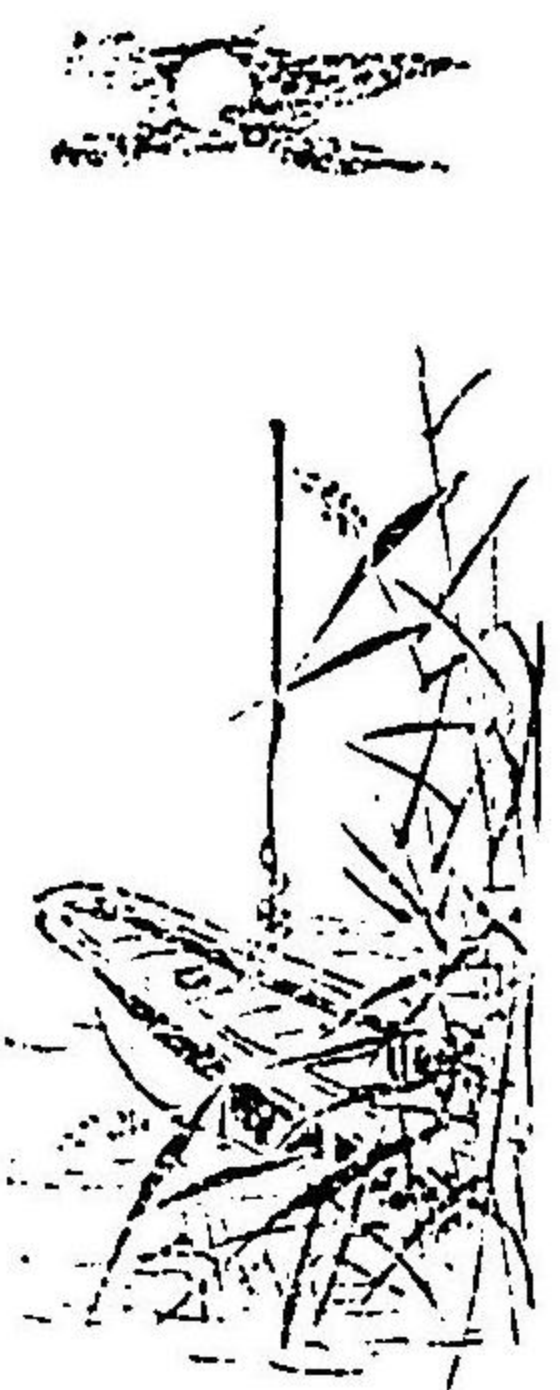
なる發相をなし得る者にても、十分なる感情を有し得らざれば造りたる花の如く、美は美なれども活氣なく眠れるが如き感あるべし。是處に於てか必ず兩者は一致合意せざるべからざる事明かなり。

人間は感情の動物なりと傳ふ、殊に音樂を好み、之を愛するものは感情深きものなり。されば風の音を聞きては心を動かす、虫の音を聞きては涙を催すも當然の事なるべし。故に唱歌時に於ける僅少なる心の變動が其感情を害し、其發相を十分ならしめざる事あるなり。唱歌せんとして登壇したる時に前方に不快なる居動なすものあるか、或は唱歌中に赤兒の泣き立つとか、又は伴奏の奏し誤りたる、等は悉く唱歌者の心を動かすの恐あれば之等は十分の注意ありたし、唱歌者も亦かゝる事に心を變ぜざる様平常より心かくべ

きなり。

十分なる感情あれば音聲もたしかに、發相も巧みに、其唱歌をして活きたる感あらしむる事も敢て難からざるなり。以上數章に於て述べたる事は、各人悉く之を用ひて益ありとは云ふべからず。甲に適したるもの、乙に適したるものもあるべし、皆其性を異にすればなり。諸子が採りて以て益とするもの或は之あらんを期するのみ。事繁雜を避けんが爲め一度是處に卷を終りぬ。尙必要なる諸點に至りては下卷に於て詳細に記述すべし。





### 質疑應答

(1) 齒の揃ひ悪しきものは、唱歌がよく出来ませんか。  
 之れは面白い御尋ねです。元來口腔は唱歌するに必要な楽器ですから、其樂器の適不適に依りては、唱歌するに非常な差があるのです。齒は可成よく揃つた方がよろしい。そして息のもれない様になつて居るのが宜敷いです。又齒の工合に依つては發音に困難な事があります。然し普通の程度までに上達するのは左程之等の事に關しません。

(2) 私は少しく大聲を發して唱ふと、聲が割れて來ますが如何したら宜敷でしょうか。

之れは其人に咽喉病があるか、左なくば十分なる練聲をやらな  
 いからです。本書第四章の練聲の項に就て研究して御覽なさい、  
 必ず上達します。上達してくれば自然大聲を使ふ事が出来る様

になられます。又唱ふ十分時間程前に、復方次亞磷酸舍利別を茶碗に水又は湯を入れたるに五六滴乃至十滴位を混じて飲用すれば、一時肺の運動を強くして、従つて大聲を出すの助けとなる事があります。但し此薬を飲用したならば茶を飲まない様にしたければなりません。其人の樂器不相應な聲を出すのは無理です。無理にすれば必ず樂器即ち咽喉を損じます。出來得るだけ本書第四章にある身体一般の養生を御守りなさい。身体の諸部分健全なれば従つて大聲を出す事が出來ます。

(3) 私の生徒はいくら聲を弱くしろと云つても矢張大聲を出して困ります。何かよい方法はありますか。

御困りの事と御察し申します。元來兒童は快活に發聲する事を好みますから自然暴聲となるのです。現今小學校に於ける唱歌は多く歌でない、音樂でない、只聲を高低して叫ぶのだと云つた人がありましたが實際さうです。其原因に二様あります。一つは軍歌の如きものを多く教へるから暴聲になりやすく、二には教師

がいつも「元氣を出して」とか「活潑に」とか云つて兒童に大聲を出さしむる習慣から是處に至つたのです。之を直す方法にも二種あります。一つは「奇麗な聲を出して」とか「美しく歌つて」等の言語を以て兒童に「叫ぶ」と云ふ事と「唱歌する」と云ふ事の區別を知らしむる事。一つは可成坐唱を多くして其折りには「先生の聲が皆なに聞ゆる位の、小さな聲を出して」と云つて決して教師の聲を打消す程の聲を出さしめない様にし、且つ其時間中には其歌曲が相當出來上りたる後二三回、若しくは三四曲、立たしめて普通の音聲で唱歌せしむる様にすれば最初こそ少しは困難を感じますが、馴れてくれば教師の欲する通りになります。

(4) 小學生徒に唱歌を教授する際には、音階練習を必ず毎時間やらなければなりませんか。

音階練習の目的は唱歌を學ばんとし、或は唱はんとする兒童に正確なる音律を悟らしめ、且つ咽喉の働きに樂音を出さしむるに必要なる要意をなさしむるのです。されば兒童に音階の正確



と云ふ感を十分起さしめなければ、音階を唱ふも別段の益がないのです。若し此點に注意せずして無意味に音階を唱せば反つて兒童の聴覺を不正確ならしむるの恐がありますからむしろやらないがよいでしょう。故に若しも十分其効を奏せざれば、時として之を廢して兒童の習慣的音階練習をして新しき感と興へなければなりません。されど之れは私が望む處ではありませぬから、可成興味を興へて音階練習を持續する方最も良方法と思ひます。

(5) 音聲の練習にはどう云ふ時が一番適當しますか。

之れは大變廣きお尋ねです。先づ一日の時間で申せば朝がよい様です。又一年中で申せば春より夏にかけてが好時期の様に思はれます。人の一生で申せば變聲期後から、二十五六才位迄が最も發達する時期であるそうです。一般に申せば、自分が唱ひたくつて堪へられぬ場合、即ち俗に氣が乗ると云ふ時があるものですが、かゝる時分には十分唱歌なり、練聲なりをなさる方が宜し

ふござります。

(6) 音樂者になるに就て如何なる點を最も注意すべきでせうか。

之れも亦随分廣きお尋ねです。第一其人の身体の適不適を調査して、次に其性質をも調べなければなりません。第一の身体云々と云ふのは、例へば唱歌を専門としよふとするには音聲が必要で、オルガン、ピアノ、ヴァイオリン等にはそれ／＼適する指の形があります。偕て其指の形が適して居ても、其人の性質が適せない事もあります。故に先づ自分が音樂者となるの性質資格を供へて居るか否かと云ふ事を調べて、さて後ち聴覺を發達せしむる様十分勉めなければなりません。

(7) 現今普通の唱歌に於ける歌詞と曲とは皆一致して居るものですか。

現今出版になつて居る小學校用の唱歌などには、多く作歌者と作曲者と別人である爲めに、往々其感情の一致しない歌がある、

之れは作者の罪でもなく、作歌者の下手なのでもない、必竟兩者別人の作になるので止むを得ないのであります。然し作歌者と作曲者とは必ず同人でなければならぬと云ふのはありません、只曲と歌詞とは、悉く一致して居ないと云ふ事を説明する爲めに斯く申しましたのであります。

(8) 私はオルガンや唱歌の復音を聞ひても快感を覺わませんが、矢張音樂的耳がないのでせうか。

左様、矢張り音樂的に耳が發達して居ないのでせう。然し一度重音を聽て快感を覺わなれば、どうしても普通の單音唱歌は面白く感じない様になります、稀には不具的に音樂を味ふ事の出來ぬ人もありますが、普通の人ならば漸次發達して復音を聽く耳が出來て參ります。

(9) 私は直ぐに咽喉が悪くなりますが、どう云ふ藥を用ひたら宜敷ひでせうか。

之れには十分良い藥はありません、若し咽喉を害した時には水

に鹽酸加利少量を溶かし(舌に感せざる程)たるものを以て、日に幾回となく含嗽すると宜しい、そして其含嗽の方法は少量づゝ回数を重ねるを可しとす、又就床の際に冷水濕布を以て咽喉を巻き、其上を乾きたる布(手拭)にてもにし)にて巻きてお眠りなさい。或は非常に身体を温めて發汗せしむるも亦益ある事があります、以上の療法は少しも害はありませんが、可成は醫師の治療を乞ふ方が安全であります。

(10) 山の上、又は高き岡などでやると大變良い聲が出る様に思ひますが實際どうでせうか。

之れは面白い御尋ねです、之れには二つの理があると思ひます、第一は他の場所でも唱ふよりも比較的實際に良い聲が出ます、一は發聲と感情とは非常に密接な關係があるので、自分で遠慮なく發聲する事が出來れば、自然平常よりも良い聲が出ます、第二には室内で唱ふ時には、色々建築物の工合で其聲の欠點が判然して來ますが、四邊に聲を妨げるものがなければ従つて此聲の欠

點も散つてしまつて、其比較的良好な處のみがよく聞けるので、夫故大聲を出し得る人は殊に斯様な場所に於ては良く聞けるのです。

(11) 俗に某は聲がたつと云ひますが、あれは美聲を云ふものでせうか。

俗に立つ聲と云ふのは鋭き聲を云ふのですが、其聲に依りて種々ありますから一概には申されませんが、如何しても實際を聴かなければ確たる事は申されませんが、然し鋭き聲の中には實際良い聲と、其人の肺量多き、身体の健康なる等に依りて大聲となり、それが自然鋭く聞え、良い聲とも思はれるのが澤山あります。元來聲音は人に快感を興ふるのが良い聲なのです。和に、除裕ある、色つやのある聲を以て最もよしとするのです。そして其音が強く感情のこもつた時には俗に云ふ、立つと云ふ聲に近く聞える事があります。或詠曲の書物に「よき音聲と云ふは近くにあつては左程にもなく一問隔たりて之を聞くに判然と

して言葉よく分り、聲の通るを云ふ、側にては、わん／＼して何事を云ふにや聞き取れず、一問隔つれば聲かすかになりて聞き分け難きはあし」と云ふが記してあります、之れは日本の聲樂家の説ですが、當然の道理だと思ひます。

(12) 日本人よりも西洋人の方が概して聲がよい様に思ひますが如何でせう。

先づそう云はなければなりません、此點に於てはごうも西洋人には及びません、之は身体の差異や、食物の工合、凡ての境遇の異なるなつて居るからであります、或人が外國に學んで歸つて來てからの話しに「食物が變つてから、すつかり聲が出なくなつた、米國に居る時にはモ一少しは良い聲であつたけれど」と云ふのがありました、凡ての境遇にもよりますが食物が餘程關係して居るらしいのです。私なども出來るだけ注意して居ります。然し西洋人必ずしも良い聲のみではありません、日本人には日本人らしい聲があります、米國人には米國人らしい聲、獨逸人には

獨逸らしい、英國には英國らしい、伊太利には伊太利らしい、ごそれ、其國風を現した、聲の性質がある様ですから、日本人らしい聲を以て唱ふのは敢て悪い事でもありません、がさて日本人らしい聲と云ふとどうも薄く、軽い様な感じがしてなりませんが、一寸聞た所は奇麗ですがどうも重さがありません、一体日本人がどう云ふ性質を幾分か有しては居ませんか、せうか、事少しく他方へ直りましたが、日本人は聲を誇る事の出来ぬ國民だと云ふ事は覺悟して居ります。

(13) オルガン、ピアノは一体完全正確な樂器ですか。  
 オルガンやピアノは、理論上より申すと決して完全な樂器ではありませんが、此兩者は音樂演奏上に非常な便利を與へつゝあるものです、殊にピアノの如きは音樂會には必ず無くてはならぬものゝ様になつて居ますから、實際は不完全でも現今之をどうせうと云ふ事は出来ずまい。博士田中正平氏が理論上よりして、其鍵の數を多くされましたが、之れは實際に演奏上困難

を感ずるものですから、單に理論上の發明として一般には使用されないと云ふ場合です、此現今のオルガン、ピアノ、が何故不完全であるかと云ふ點に至つては説明が余程六ヶ敷くなりますから是處には畧して申す、昔ヘルモホルスと云ふ理論家が、一八音を二十四となし、次で之を畧して二十一音となしました、田中氏のは全じく二十一鍵ですが、音は實際鍵盤を動かせる仕掛けによつて三十六丈け出る様になつて居ます、元來オルガン、又はピアノ、を以て種々なる調を演奏しよふと思ふのには一八音間に五十三の音がなければ先づ完全に近いものと云ふ事は出来ません、それを僅か十二音としてゐるのですから不完全な事は申すまでもございませぬ。然し決して普通の唱歌教授に使用する事が出来ない程の不完全ではありません、現今に於ては適當な樂器であると思ひます。

今變と嬰フラットの事に就て一寸申しておきます、一體變と嬰とは有鍵樂器に於ては全く同一の黒鍵であります、理論上よりすれば

ば變は嬰よりも低く、嬰は變よりも高くあるべきのです、即ち有鍵樂器に於ける半音は一全音の中間に高度を有して居るので、理論上よりすれば、變は半音より低く、嬰は高くなるのです、換言すれば、嬰は其中間より直上音に近く、變は其中間より直下音に近くなるのです。

(14) 普通の音程を持つて居るもので、凡そ何年位教師に就て學べば人の前で唱へる様な音聲となれますか。

之れは人によつて非常に差異がありますから一概に申されませんが、普通の聴覺、普通の音聲、普通の体格を備へた人で、専門教師に就て先づ三年位も練習したらば一寸人の前で唱歌する事が出来る様になりませう、然し素人としてならば一年も熱心によれば宜しいでせう、之は大變教師によります、又練習する人の境遇にもよりますから、判然申事は出来ません。

(15) 拍節器に依つて拍子を合せると、大低の曲は非常に早過ぎる心地がしますが、あれでも感懐を込めて唱へるもの

でせうか。

一体感懐をこめると云ふ事は其歌意を十分悟つて、之れを表に現すのですから、遅くとも早くとも、其感懐には大した關係を有して居ません、日本人は概して感懐と云ふと、悲哀な感懐を指す様になつて居ますが、喜びの感懐、勇壯の感懐、快活な感懐などは、拍子が遅くては十分表出する事が出来ないのであります、そして元來拍節器によるのが最も正確なので、其正確な拍子に則つて居ながら急速だなど云ふのは、其標準が異つて居るので、笑ふべき話として云はなければなりません。そして其急速な拍子に従つて唱歌する場合には、重々しくなく、輕快に唱はなければなりません。

(16) 日本語より英語の方が唱ひ易い様に思はれますが如何でせう。

お言葉の通りどうも實際は唱ひ易い様に思はれます、然し其眞の發音から論じて見ると英語もながく困難なものに相違ひ

りません、必竟日本人には其發音が十分解らないから、幾分か違つて居ても能く唱へたと云ふ感じがあるものでせう。之を言語學上より云へばどう云ふ風になるか私は存じませんが、壯大な歌には獨逸語が唱ひ易く、愛らしい歌には伊太利語がよく、優美な歌には佛語が適して居ると、而して日本語は悲哀な曲に適するやうであると、某雜誌に記してありました。然しどうですか、私は存じません。

(17) 1, 2, 3, とか, d, r, m, とか云ふ階名で先づ曲丈を、覺て後

に歌詞をつけると云ふのはどう云ふ譯でせう、最初から歌詞で唱つても別段の差支はない様に思はれますが、一體階名で唱ふと云ふ事は音律を正確ならしむる事に非常な益があるので、階名で唱ふと云ふよりはむしろ其階名を稱へれば自然に其音に高低が出来、そして、樂器なしでも唱ふ事が出来る様になる筈のです、然るに階名とは曲に於ける歌詞同様に考へて曲其ものとは一向に關係がない様に思つて居る人が澤山

あります、大なる誤解と云はなければなりません、故に曲を覺るには是非階名で唱はなければなりません、其階名に對する耳がない人ならば、歌詞で覺てても左程差支はありません、然しそれは眞實の學び方ではありません、さすれば三度の音程例へば、1から3、に至る高さは如何なる調、如何なる場合でも全じ事ですから、數多の曲を階名で覺る中には、此音程なるものが多少耳に残つてくる様になります、此音程の練習と云ふものは非常に大切なもので、音程が十分正確に出来れば立派なものです、中々六ヶ敷音程などになると、正確には出来ないので、現に之れはコーリユ、ブندگان、と云ふ音程ばかりの練習本がある位です、又西洋の或獨唱家が其子弟に五年の間、唱歌は一つも教へずに只此音程計り教へたやうです、そして五年目に「最早之れで澤山だ」と云つて其後は別段に教授しなかつたと云ふ事を聞きました、が、さもあらふと思はれます、かゝる理由があるので、すから、音階を知らない兒童に對してはともかく、少しく音階の

何たる位の事を知つて居るものは可成階名で唱つた方がよいのです。

(18) 一体人聲と云ふものはどの位まで發達するものでせうか、

私は之れに就ては十分調査した事がございませぬから、判然御答申す事は出来ませんが、自分の信する所では随分不思議な程發達するものと思ひます、昔音楽大家モザート氏の同時代にバスターデラと云ふ婦人がありましたが、二千振動實に中央のハ音(C)より三八音上のハ音(C)に、概算すべき高音を出す事が出来たそうです、之には流石のモザート氏も大に驚いたと云ふ事でありませぬ、此婦人の最高音は五連八音の普通風琴には無いのです、風琴の最高音より高き事四音、實に不思議と云ふより他ありません、又或人は百人ばかりのラツパ隊を伴奏として獨唱したと云ふ事です、之れは男子ですが、どの位な大聲であつたのでせう、想像が出来ませぬ、私は僅か二十三四人の小さい管絃樂に合

せて唱つた事がありました、仲々骨の折れるもので私の知己友人は、皆危ぶんで居た様でした、どうしてあの壯大な音に打消さず、判然獨唱して行く事が出来るであらふかと思つて、然し先づどうかこうか唱ひ終る事が出来ました、私は學校でも左程大聲と云ふのでもありませんでしたが、又決して小さい聲と云ふ方ではあつた、それが一身の勢力を振るつて唱はなければ聲が聞けなくなるのです、前述のラツパ隊に合せたなど云ふのはどの位大聲であつたか實に驚くより他はありませぬ、前二者の如きは異例でもありませんが、随分養成の次第によつては、人間の音聲も發達するものと云はなければなりません。

(19) 私は俗に云ふ地聲から裏聲にうつる時に力がぬけて、どうしても自由に聲が出ません、どう云ふものでせうか、

之れは困つたお尋ねです、御婦人にはかゝる人が澤山あります、然しかゝる人は概して高音が出るもので従つて其音域も廣いのです、物事凡て完全は得難いもので、音域が廣ければ音聲が悪

いごか、量が少ないごか云ふ事がありますし、量が十分ある人は音域が狭いと云ふ様な場合です、さてお尋ねの次第も即ち是處にあるので、余程の練習をつまなければ、自由に力ある聲を出す事は出来ません、然し其練習の主なるものとしては先づ可成高き音に於て聲を變すべき事であり、出来ず、出れるだけ地聲と云ふ性質の聲を唱ふのです、音階を唱ふ時なども地聲を用ひ得らるゝ高度まで用ひて、愈々苦しくなつてはじめて、余り急激な變化を來たさない様にして聲を變すればよいのです、而して本書練習の項に記した注意を以て、心永く練習すれば追々よくなります。之以上は實際其人に就いてよなければ御教へ申事は出来ません。

(20) どう云ふ聲が美聲と云ふのですか、又どの様な聲が發達致しますか。

一体聲の美、醜と云ふのは、聴者の感情を意味したものであります、或書に各國の美人を擧げてありましたが、或國に於ては足の

小なるを以て美人とし、又或は肥滿なる体軀を美とし、或は細腰を好むなどさまざまです、されば聲も國によりて多少の差異があり、人に依りて美と感ずると否とがあります、例へば西洋婦人の聲を聞きなれない人には折角の美聲も悪感を與へる様なものです、又私の云ふ聲樂より論じますと、彼の淨瑠璃語りなどの聲はどちらか云ひますと、餘り美と云ふ方ではありません。如斯各々感情が異なるもので、一様には申されません、然し私の信する所では、人耳に不快感を與へない聲が美と云ふのだと思ひます、そして此類の中に種々な性質があります、試みに今其普通用ひらるゝ形容詞を擧ぐれば、美しい聲、立派な聲、壯大な聲、など云ふものがあります、又圓き聲、水のしたゝるが如き聲、よくこなれたる聲、愛らしき聲、豊かなる聲、など形容の出来る様に多少美聲と云ふ中にも差異があります、必竟人耳に快感を與へ得ると云ふ事になるので、余りにキンキンしない、又苦しそうでない聲を賞讃する様にならなければなりません、日本では淨瑠璃



語りや、之に類した聲樂家が、いかにも咽喉に苦痛を有する様な  
 發聲をして得意になつて居ますが、之れは元より發聲が悪ひの  
 です  
 が、かゝる風に養成した聲は、どうも一種の癖がありまして、圓満  
 な平和な、快感を人耳に與へないのです。又いかなる聲が發達す  
 るかと云ひますに、一言にして云へば癖の無い聲とでも云はな  
 ければなりません。唱ひ方の癖と云ふのでなく、聲其ものに癖  
 があるのです。私は實に經驗がありせんから、確かに云へませ  
 んが、先づ之れに遠くは、あるまいと思ひます。

26/12/37

明治卅七年四月十三日印刷  
 全 年四月十五日發行

定價金四十五錢

編纂者 青木 兒

發行者 安達 音治

新潟市西堀通五番町五番戸

印刷所 株式會社新潟日報社

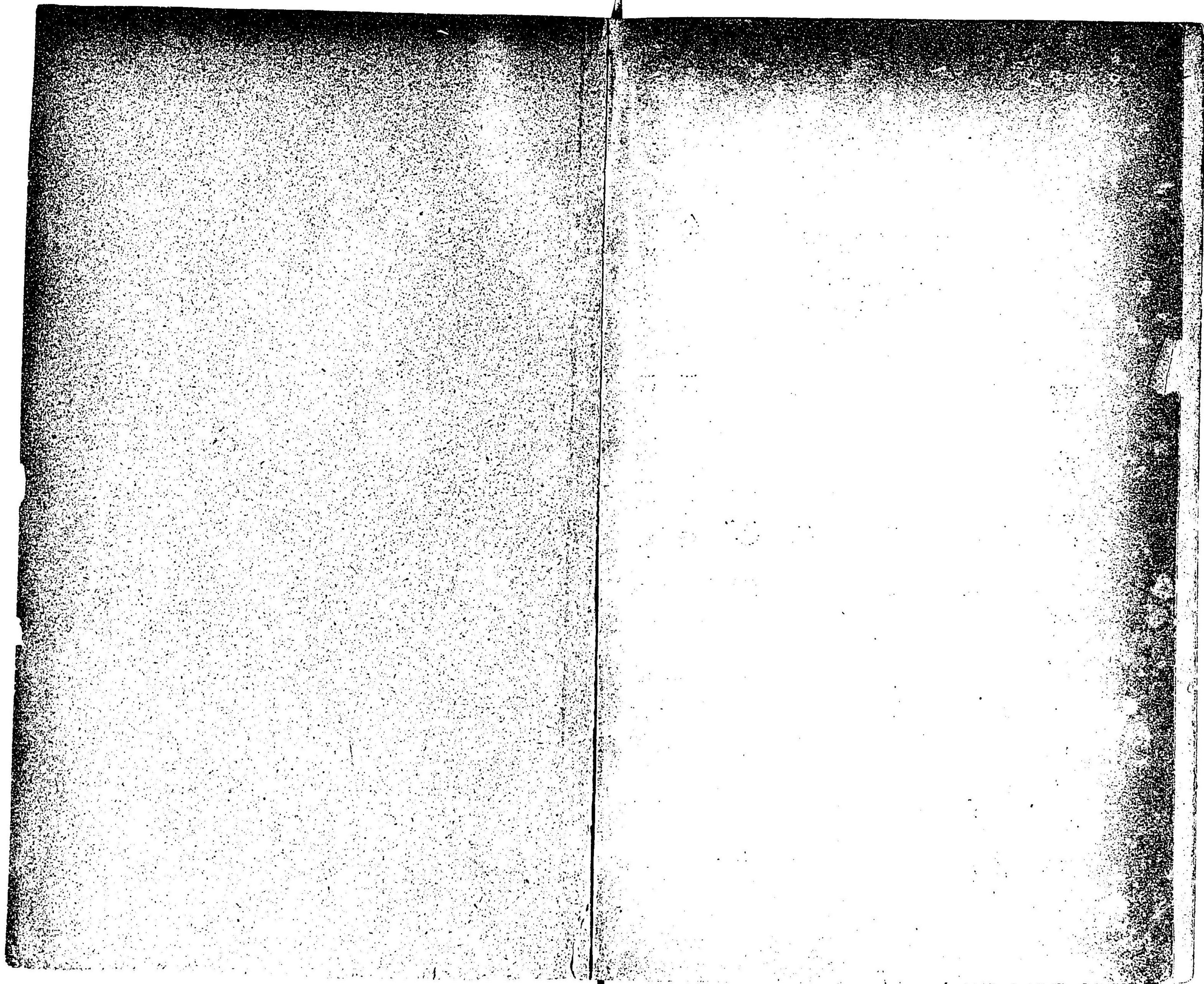
全市西堀通三番町五十八番戸

印刷者 平野 久松

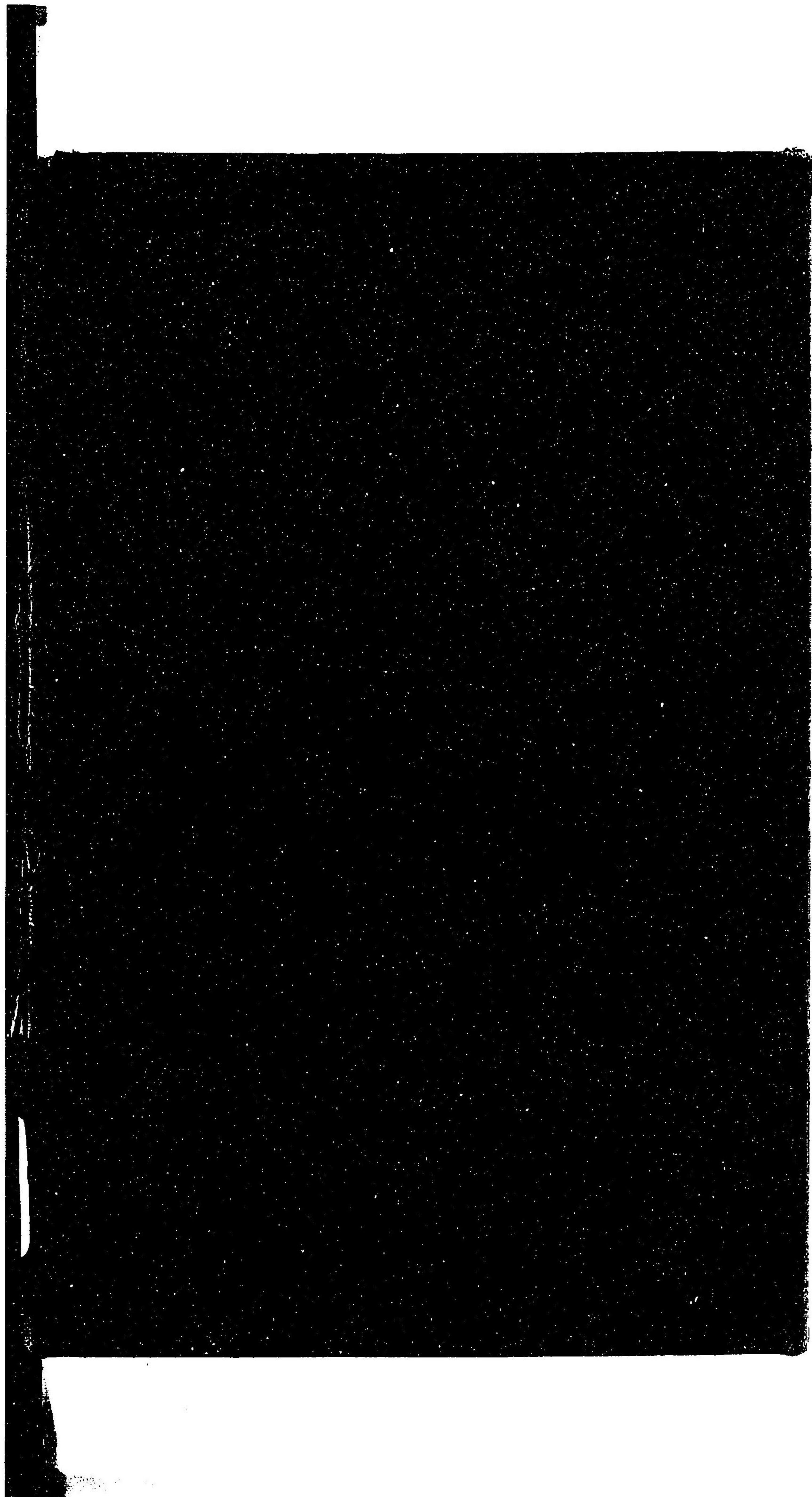
全市寺裏通二番町十三番戸

著作權 所有

賣捌所 各府縣下書林



77  
404





072680-000-6

77-404

唱歌法大要

青木 兎/著

M37

CEH-0198

